法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

創造都市と金沢２１世紀美術館の関係性

山田, 泰幹 / Yamada, Yasumoto

(発行年 / Year)
2009-03-24
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2009-03-24
(学位名 / Degree Name)
修士(工学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)

P377.5
M35-2
2008-46

2008年度　修士論文

創造都市と金沢21世紀美術館の関係性

指導教授：渡辺真理　副査：陣内秀信/高村雅彦

大学院工学研究科修士課程建設工学専攻修士 課 程

07R5344

ヤマダ　ヤスモト
山田泰幹

2008年度　修士論文

2008年度　修士論文
法政大学大学院工学研究科修士課程建設工学専攻修士２年渡辺真理研究室

創造都市と金沢２１世紀美術館の関係性

指導教授：渡辺真理
副　　査：陣内秀信
　　高村雅彦

07R5344　山田泰幹

Introduction

The 20th century was the times of the heavy industries mainly on the manufacturing industry. The 21st century is the times of the knowledge economy. It is said that knowledge and information become the leading role of the economy. What will be necessary in city economy? It won't be a big factory, but the personal economic development carrying out a creative activity will be an important key for city economy. In other words, a city reproduction strategy to draw charm of local culture gathering creative people will be necessary.

Then what kind of means should we take for local culture by creative? I think that the power of the art museum may give the area originality as one method.

According as urbanization and a population growth, expectation to the culture and the art rise. Success of the city reproduction by having built an art museum occurs successively in many part of the world. From receiving these results, a role to achieve attracts attention of local reproduction and reformation of society as well as the original value of the art museum in itself. The art museum can become the key device for a city reproduction strategic. In the 19th century, the modern capitalism was supported by "Railroad" and "School".In the 20th century, "Public Road" and "Securities Exchange" opened up a vision of the public-consumption-society. In 21st century, "Internet" and "Art Museum" is in the spotlight that may open up a new vista of the future. "Internet" is virtual, but offers overwhelming information to us. On the other hand, "Art museum" stimulates our inspiration realistically ; this is a reason " Art Museum" is worth while to notice.

On the basis of such a point, culture and art are expected as a key opening up the next era abroad. However, unfortunately it is still the present conditions in Japan that art and culture is not regarded as important. Japan should look on a museum as existence to open up the next era like many foreign countries. On the contrary, the art museum as a symbol of the waste for the period of the high growth economy in our country. And also, it segregate as a target . Precisely, in Japan, the art museum has been thought about as the

place of "pure culture" or "the facility of customer pulling"of the cities. The inefficient investment for the art museum made the result of the art museum. Therefor, the true significance of existence and value of the art museum in Japan are vague. I cannot keep on being vague as it is with the significance of existence of the art museum, because I believe that the art museum have hidden power to regenerate a city. Besides, it can be reclaim the potency of people, and also it can become the catalytic device to revolutionize our society.

Purpose

A purpose of this study is to find the possibility and the role of "Art Museum" in "Creative City".
I would state the characteristic of "Creative City".
"Creative city" is creation activity by the citizen is active.
"Creative city" have a rich originality in the industry and it's culture.
"Creative city" have flexible city economic system.
"Creative city" is rich in "Place of the Creation" with ability for problem solving for an environmental problem and the problem of the community.

I consider "Art Museum" may be saddled with the role of this "Place of the Creation". Therefor I decided to pay my attention to "Kanazawa" where is a Japanese "Creation City". Then, I pursue the relationship between "Kanazawa" and "21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa". In addition, I inspect the effect of cooperation between "21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa" and "Surrounding Environment" bringing to "Kanazawa". In the other words, the purpose of this study is to research the effect of "Art Museum" in "Creative City".

Method

I would research the relationship of "Art Museum" in "Creative City". At first, I state definition what "Creative City" is. Then, I deliberate on significance of "Art Museum" in "Creative City". About the formation and ideal method of "Creation City", I would study mainly on documents.

About "The present conditions of the creative city in 'Kanazawa'", "21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa", and "Relationship between '21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa' and 'Surrounding Environment'", I would clarify it by documents and hearing investigation.

Chapter 1; I would look on what "Creative City" is, looking back on a trace of a city idea changing with the times. And also I want to give the characteristic to be seen in the "Creative City".

Chapter 2; I would conclude about the present condition of "Kanazawa", where is performing an advanced action about the formation trend of the intellectual "creative city" in our country by the document investigation. And also conclude about the nature of "creative city" in "Kanazawa".

Chapter 3; I would look into the as "miraculous art museum" as "21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa" which is a model case of the local city activation.

Chapter 4; I would consider the relation of "21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa" and "Surrounding Environment". I investigate their conventional activity of "21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa" from the preliminary stage to now. And I see a mutual effect that born in between.

Chapter 5; I take up whether "21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa" and "Surrounding Environment" function. Then, I inspect whether the result draws charm as the creation city more.

Lastly, I compile the relationship of creation city and the art museum, modeled by Kanazawa. I sentence a conclusion by realizing the effect of "Art Museum" bringing in "Creative City".

はじめに

20 世紀は製造業を中心とした重工業の時代だった。21 世紀は知識経済（ナレッジ・エコノミー）の時代。知識と情報が経済の主役となると言われている。都市経済において何が必要になるのだろうか。それは、大きな工場ではなく、クリエイティブな活動をする個人の経済発展が重要なカギとなる。つまり、クリエイティブな人達を集めるような地域の文化の魅力を引き出す都市再生戦略が必要なのである。

では、どのような手段で地域の文化を創造的にすれば良いのか。私は、一つの方法として、美術館の力が、地域に創造性を与えるのではないかと考えている。

都市化と人口成熟化に伴い、文化や芸術への期待が高まっている。世界各地で美術館を、てことした都市再生の成功事例が相次いでいる。それを受け、美術館自体の本来の価値に加え、地域再生や、社会変革に果たす役割が、注目されている。美術館は都市再生戦略のカギを握る装置となり得るのである。19 世紀、近代資本主義は「鉄道」と「学校」に支えられた。20 世紀、大衆消費社会は「道路」と「証券取引所」が切り拓いた。21 世紀は「インターネット」と「美術館」が時代を切り拓くのではないかと注目されている。「インターネット」は、バーチャルではあるが、圧倒的な情報量を我々に提供し、「美術館」は、リアルに我々のインスピレーションを刺激してくれるのが、注目されている理由だ。

このような点をふまえ、海外では、文化や芸術が、次の時代を切り拓く鍵として期待されている。しかし、残念ながらまだ日本国内ではその意識は薄いのが現状である。

日本も諸外国のように、次の時代を切り拓く存在としてミュージアムを見れば良いのだが、それどころか、美術館は高度成長期の無駄使いの象徴として、バッシングの対象とされている。そもそも日本では、美術館は、純然たる文化の殿堂、または、都市の集客施設として考えられてきた。その結果巨額のハコモノ投資が正当化され、現在バッシングの対象とされているのである。従って、日本における、美術館の真の存在意義や、価値は、曖昧なままなのである。美術館の存在意義をこのまま曖昧なま

まにしておくわけにはいかない。なぜなら、美術館は都市を再生する力を秘めているからである。さらには、人々の潜在能力を開拓し、社会を変革する触媒的な装置になり得るからである。

はじめに

目次

序　章　研究目的・研究目的
008～

第１章　創造都市とは
010～

第２章　金沢の創造都市性とは
023～

第３章　金沢 21 世紀美術館とは
038～

第４章　金沢 21 世紀美術館と周辺環境とのかかわり方
053～

第５章　結　論
金沢 21 世紀美術館にみられる創造都市と美術館の関係性
089～

おわりに
098～

研究目的

「創造都市」における「美術館」の可能性、秘めた潜在能力、役割とは何か。それを探求するのが、本研究の目的である。

「創造都市」とは、市民の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備え、グローバルな環境問題や、あるいはローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ都市である。

この『創造の場』の役割を、「美術館」が担えるのではないか。そこで、日本の「創造都市」である“金沢”に着目し、“金沢”と“金沢２１世紀美術館”の関係性を探る。“金沢２１世紀美術館”とその“周辺環境”との連携が“金沢”にもたらす効果を検証する。つまり、「美術館」が「創造都市」にもたらす効果を探求することにより、美術館にかせられたその役割を知ることが本論文の目的である。

研究方法

「創造都市」における「美術館」の関係性の研究にあたり、まず「創造都市」とはどういうものかという定義づけを行なう。そして、「創造都市」に必要な要素としての「美術館」は何かという検討を行う。

「創造都市」の形成、あり方については、文献調査を中心に進めていく。

“金沢”の創造都市性の現状や、“金沢21世紀美術館”、それに“金沢21世紀美術館”と“周辺環境”の関連性については、引き続き文献調査により明らかにしていく。

第1章では、「創造都市」とは何であるかを、時代と共に変化していく都市論の軌道を振り返りながら見ていくことにする。そして、ここでは、創造都市に見られるその特徴をあげたいと思う。

第2章では、我が国の知的創造都市の形成動向について、先進的な取り組みを行なっている“金沢市”について文献調査による現状と、“金沢市”の創造都市性についてまとめる。

第3章では、地方都市活性化のモデルケースともなり、「奇跡の美術館」と呼ばれる“金沢21世紀美術館”の準備段階から今までの取り組んできた活動についての調査を行う。

第4章では、“金沢21世紀美術館”と“周辺環境”の関わり方、相互間に生まれた効果を見る。

第5章の結論では、“金沢21世紀美術館”と“周辺環境”が機能しているかを取り上げ、その効果が「創造都市」としての魅力をさらに引き出しているかを検証し、最後に、金沢をモデルとした、「創造都市」と「美術館」の関係性をまとめ、「創造都市」にもたらす「美術館」の効果を具体化し、美術館の今日的な役割について考察を深め、結論とする。

第1章 創造都市とは

<第1章　創造都市とは>

「創造都市」とは何であるかを、時代と共に変化していく都市論の軌跡を振り返りながら見ていくことにしよう。

【都市とは何か】

「都市とは何か。それはどのようにして生まれ、これから先どうなるのか。都市のあらゆる発現形態にただ1つの定義をあてはめることは出来ないし、またその生成、発展、衰亡の全ての変貌をただ1つの描写で説明することは出来ないだろう。」

（ルイス・マンフォード *1-1：「歴史の都市 明日の都市」）

20世紀が「国家の世紀」。21世紀は「都市の世紀」。都市の世紀は今、「世界都市」の概念から、「創造都市」が注目を集めつつある。マンフォードの言葉のように、都市の全てが1つの、唯一のモデルによって解明されるわけではないが、「創造都市」は、可能性を秘めている。

「国家の世紀」から「都市の世紀」に移行する際に、生まれたのが「世界都市」である。では、「世界都市」とはどのような都市なのだろうか。

*1-1 ルイス・マンフォード Lewis Mumford 1895～1990

アメリカの文明、社会批評家。ロングアイランド生れ。ニューヨーク市立大学でP. ゲッデスから都市計画論を学び，1923年ごろアメリカ地域計画協会 Regional Planning Association of America を設立し，その理論の普及に努める一方，グリーンベルト都市の諸計画を標榜。スタンフォード大学，ペンシルベニア大学などの教授も務めたが，もっぱら在野の立場から近代文明を批判する評論活動を行った。都市の芸術性，建築の社会的側面を強調する論評は世界的に注目を集めた。処女作《ユートピアの系譜》(1922, 邦訳 1971) 以来，《都市の文化》(1938, 邦訳 1974),《歴史の都市――明日の都市 The City in History》(1961, 邦訳 1967) など30余の著書がある。

【「世界都市」とは】

「世界都市」とは、1980年代中頃から世界システムの中における、ニューヨーク、ロンドン、東京などの、巨大都市の新たな経済的機能に関心を寄せてきたJ・フリードマン教授（「世界都市・仮説」）によって理論フレームが提出された概念である。さらに、S・サッセン教授（「世界都市　ニューヨーク、ロンドン、東京」）らの実証的研究によって、この仮説がより具体的に肉付けされ、次のような内容で語られている*1-2。

*1-2　佐々木雅幸「創造都市への挑戦―産業と文化の息づく街へ」岩波書店　2001/06　p.5

1．世界都市とは、1980年代から本格化するグローバル経済の頂点に立つ多国籍巨大企業や、巨大金融機関の本社や意思決定部門があり、カジノ資本主義の巨大なルーレットと言うべき国際金融市場が形成され、金融と経済の世界的司令塔の役割を演じる都市。

2．世界都市には、法人企業のエリートと、金融専門家の他に、グローバルな経済活動を支える法律、会計事務所、経営コンサルタント、広告宣伝業などの専門サービス業で働く高額所得者が集まり、IT関連のSOHO事業者や、エンターテイメント、メディア・アートなど創造産業で働く芸術家たちも多い。しかし、一方で、レストランやホテル、そして建設現場などで働く相対的な低所得者も集中している。つまり、1つの都市の中に世界的な富と、貧困の両極分化が見られる都市でもある。それゆえ、ホームレスの対策や移民の受け入れに伴う財政負担など、たえず特有の都市問題や財政ストレスに悩まされる都市でもある。さらに、世界中から集められた富を基盤として、世界都市とは分化を育て、文化発信の力に富み、世界の都市文明をリードする都市でもあるが、その一方で、その圧倒的な影響力のために周囲の都市からは文化帝国主義という批判を免れない都市でもある。

S・サッセン教授（「世界都市　ニューヨーク、ロンドン、東京」）

【「世界都市」から「創造都市」へ】

「国家の世紀」は「都市の世紀」へと移行し、さらに「都市の世紀」は、「世界都市」から「創造都市」へと移行しつつある。

ニューヨーク、ロンドン、東京等の一国の国民経済の規模を凌ぎ、世界経済に重大な影響力を与える「世界都市」の出現により、「国家の世紀」は「都市の世紀」へと推移している。その転換を推し進める理由は次の３つである。

１．経済活動のグローバル化により、「国民国家の退場」あるいは、「国民経済の黄昏傾向」という現象が強まり、国民国家と国民経済の枠組みが後退し、かわりに、従来はサブシステムであった、都市自治体と都市経済の重要性が高まっている。つまり、グローバル経済の司令塔の機能を演ずる「世界都市」が頂きに君臨し、国民国家を凌ぐ力を得たのである。

２．国民経済を支えてきた官僚的集権国家の解体や再編成の傾向。膨大な官僚機構を持つ現代の中央集権国家はその硬直性や変化への対応能力の低下の結果、深刻な財政危機に陥り、集権的国家システムから、環境変化や住民ニーズに効果的に対応しうる都市と自治体を主役とする分権的社会システムの模索が始まっている。

３．IT革命により、コンピュータ、情報・通信ソフトウェア産業が興隆し、素材型重工業が衰退した結果、物的生産に比して、知的生産の比重が急増した。そのため、大学院大学・研究所などの文化施設、そして都市景観や都市デザインにいたる都市の文化・学術集積が先端的で創造的な都市型産業を生み出し、発展させるインフラストラクチュアとして重視されるようになり、「文化と経済の創造性に富んだ都市」＝「創造都市」に注目が集まっている。

【マンフォードの都市再建論】

都市論の古典的名著とされる「都市の文化」の著者であるマンフォードは「都市の文化」の中で、次のように都市の定義を与えている。*1-3

*1-3 佐々木雅幸　「創造都市への挑戦―産業と文化の息づく街へ」 岩波書店　2001/06　p.33

『完全な意味における都市とは、地理的網細工、経済的組織体、制度的過程、社会的活動の劇場、集合的統一体の美的象徴である。一方において、それは共通の家庭的・経済的活動の物理的枠組みであり、他方においては、それは人間文化の意味ある活動と昇華された衝動の意識的な舞台装置である。都市は芸術を育てるとともに芸術であり、都市は劇場をつくるとともに、劇場である。人間のより目的的活動が人間や出来事や集団と争い協力しながらさらに意義深い頂きへと形成され、実現されるのは、都市において、劇場としての都市においてである。』

（ルイス・マンフォード：「都市の文化」）

このように彼は、「都市」を家庭的・経済的活動共通の枠組み（＝インフラストラクチュア）と文化的活動との統一した「容器」として、つまり「機能性と芸術性」の二重性から定義し、その容器の中で演じられる機能を、「文化的貯蔵、伝播と交流、創造的付加の機能＝これこそ都市の最も本質的な機能である」とし、要約的に都市を「文化的個体化の単位としての地域」と定義している。

さらに、マンフォードは、師事していたゲディスの都市発展説を修正し、都市の発展と衰退の輪廻説を展開している。

第一段階の「原ポリス」では、村落が発起し、経済的・文化的エネルギーが蓄積する。第二段階の「ポリス」においては自由なエネルギー、自由な時間が解放され、社会的分業が発展し、文化的蓄積が増加する。次いで、第三段階の「メトロポリス」では世界貿易が発達し、経済競争が激化する一方、異文化接触により、文化的エネルギーが最大限に解放される。しかし、第四段階での「メガロポリス」では、衰退が始まる。資本主義的工業化の進展は、都市を金儲けのための空間＝金銭的営業空間と一面化し、独占資本主義の形成に伴って、ニューヨークを筆頭に少数の巨大都市圏（＝メガロポリス）が出現する。しかしそこは、金融機関、官僚機構、そしてマスメディアが集中する政治・経済・文化の三位一体的支配中枢となった。

ここでは「芸術・文学・建築・言語における文化的産物を、おおむね金銭的見地から標準化してしまう。機械生産が独創的な芸術にとってかわり、巨大さが形式にとってかわり、量の大小が意味にとってかわる」

小さな都市はメガロポリスの網の目野の中に吸い込まれ、巨大都市の悪徳を真似し、しかも大都市では未だ残存している学問や文化の社会制度が小都市にはないために、低級な水準に落ち込んでいく。

そして、第五段階の「専制都市」においては、メガロポリスにおける生活から遊離した消費文化によって、市民の活力は衰え、都市自体の巨大さ故に官僚機構が肥大化し、専制都市（＝ティラノポリス）へと堕落し、自治体と国家が破産し、芸術と科学は創造を停止する。

最後に第六段階の「ネクロポリス（死者の都市）」に至り、都市の廃墟の上に、再び「ポリス」が出現する。

（ルイス・マンフォード：「都市の文化」）

これが、マンフォードの「都市輪廻」である。[*1-4]

*1-4 佐々木雅幸 「創造都市への挑戦―産業と文化の息づく街へ」 岩波書店　2001/06 p.35

では、衰退していく都市はそのようにすれば再生することが出来るのだろうか。マンフォードが言うには、「メトロポリス再建の努力はすべて、メトロポリス経済の基礎的形態に対する反逆まで到達しなければならない。その努力は人口の増加、密集のための機械的便益の増加、都市地域の耐えざる拡大、処理しがたい巨大性と非合理な偉大さに反対するよう働きかけなくてはならない」（「都市の文化」）と語り、都市再建の基本思想として、「販売と利潤のための生産が主権を握る社会」から「消費と奉仕が優先する生命経済ないし生技術経済」への転換を提唱している。

『生技術経済のもとでは、消費は生命の保持と高揚に向けられる。ここでは質的基準が何よりも大切である。生活という言葉は決して漠然としたものではない。それは、出産と育児、健康と充実した生活の維持、人格の育成、これらすべての活動の舞台としての自然と環境の充実などを意味する。

金銭経済は機械の役割を拡張するのに対して、生技術経済は専門的サービスの役割を拡大する。収入と使えるエネルギーの大部分は、芸術家、科学者、建築家と技術者、教師と医者、歌手、音楽家、俳優を支援するために使われる。このような変化は、前世紀に着実に進行し、その傾向は統計的にも証明できる。しかし、その意義は、一般的にはまだ良く理解されていない。

また、それはもう1つ別の可能性、全く別の必要性をもたらしたのである。つまり、生活条件の改良ばかりではなく、社会的遺産の目的的創造と活用のための全世界的な都市再建である。』

（ルイス・マンフォード：「都市の文化」）

つまり、全世界的な都市再建のためには、「金銭至上経済」から、「人間の創造性を高める経済システム」への転換が緊急の課題となる。マンフォードは「都市の文化は究極的にはその高度な社会的表明としての生活の文化である」と語り、「国土計画と都市計画の任務は、もっとも豊かな人間のもっとも充実した人間生活を維持するような地域をつくり、あらゆるタイプの性格や気質や人間的感情に安息地を与え、人間の深い主観的要求に対応する客観的な場を創造し、保存することである。」と締めくくっている。

【「創造都市論」2つの系譜】

現代の「創造都市」論における系譜についてみると、次にあげる2つの潮流があるように思われる。*1-5

1．ジェイン・ジェイコブズ女史の「創造都市」
2．欧州創造都市研究グループがまとめた「創造都市」

この2つである。順に見ていく。

1．アメリカの研究者であるジェイン・ジェイコブズ女史の「創造都市」

ジェイコブズは、アダム・スミスの古典「諸国民の富」を念頭に置き、創造的な都市経済を実現することこそ、国民経済の発展の前提であると主張している。

そこで、ジェイコブズが注目したのは、ニューヨークや東京のような「世界都市」ではなく、中部イタリアの中規模都市であるボローニャやフィレンツェだった。

彼女は、これらの地域に集積する特定分野に限定した中小事業群からイノベーションを得意とし、柔軟に技術を使いこなす高度な労働の質を保持しており、大量生産システム時代に一般的だった市場、技術、工業社会のヒエラルキーの画期的な再編成をもたらすものであるという「第二の産業分水嶺」の著者、チャールズ・セーブルの研究に大きな刺激を受けている。彼女は、これらの都市井の主役である職人企業というマイクロ企業のネットワーク型の集積が示す「巨大な小企業群、共生関係、職場移動の容易さ、経済性、柔軟性、効率の良さ、適応性の素晴らしさ」に感銘を受けた。彼女は、その特徴を、輸入代替による自前の発展とイノベーションとインプロピゼーション（臨機応変の改良）に基づく経済的自己修正能力、あるいは、修正自在型経済と把握している。（輸入代替とは、先進技術を他地域から学び、これを吸収し、自前の技術体系とし、他の産業との関連性を豊かにしながら、地域内市場を優先的に発展させる方式。インプロピゼーションとは、条件変化に素早く柔軟に対応できる能力。）

*1-5 佐々木雅幸「創造都市への挑戦―産業と文化の息づく街へ」岩波書店　2001/06　p.37

彼女は、「これらの密集した共生的小企業群の中で観察し、画期的変化であると感じたその力と驚異的事実は、すべて創造都市に固有するものであった。」と記述している。つまり、たとえ小企業であっても、「共生的小企業群」として果たす、大企業には不可能な「修正自在型経済」を、大量システムの次にくる画期的変化と彼女は捉えたのである。

ジェイン・ジェイコブズの「創造都市」とは、脱大量生産の時代の柔軟性に富み、革新的な「修正自在型」の都市経済システムをもった都市のことである。

2．欧州創造都市研究グループがまとめた「創造都市」

ヨーロッパ社会において、他国より早く製造業が衰退し、青年の失業者が増加し、従来採用されてきた福祉国家システムが、財政危機に直面した。そこで、福祉国家の見直しの中で、国家の財政的支援から、自立して、どのように新しい都市の発展の方向を見出すかという問題意識が生まれた。その際、創造都市研究グループは芸術文化が持つ創造的な力を生かして社会の潜在力を引き出そうとするヨーロッパ都市の試みに注目し、その経験の総括を通じて「創造都市」を理論化しようとしている。

特に、芸術活動の持つ「創造性」に着目し、自由で創造的な文化活動と文化のインフラストラクチュアの充実した都市こそは、イノベーションを得意とする産業を擁し、解決困難な課題に対応した「創造的な問題解決能力」を育てることができ、「その連鎖反応が、既存のシステムを変革する」という仮説を提示している。

『都市の創造性にとって大切なのは、経済、文化、組織、金融のあらゆる分野における創造的問題解決とその連鎖反応が次々と起きて既存システムを変化させる流動性である。創造的問題解決の要素としては、人、創造的技術、環境（情報とコミュニケーションのシステム、文化や芸術の多様性、教育システム、刺激的な環境、社会的安全、騒動や不安からの開放）を挙げることが出来る。』

（欧州創造都市研究グループ：
「創造都市のための文化インフラストラクチュアと文化活動の重要性」）

彼らの研究の特徴は、産業のイノベーションとインプロビゼーションを得意とする都市を「創造都市」としているJ・ジェイコブズの影響を受け、「創造性」を（空想や想像よりも実践的で）知識（インテリジェンス）と革新（イノベーション）の中間にあるものとして、位置づけている。

つまり、彼らの「創造都市」とは、「芸術文化と産業経済をつなぐ媒介項を持つ都市」としている。

【「創造都市」とは】

「創造都市」とは、人間の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備えた都市のことである。そして、この創造都市は、21世紀に人類が直面するグローバルな環境問題やローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行える「創造の場」に富んだ都市のことである。

【「創造都市」の特徴】

創造都市の姿は、次の4つの点が特徴である。

1．ハイテクまたはハイタッチなサービス産業が都市の繁栄を支えている。

ハイテクとは、コンピュータソフトの開発者、医師、エンジニアなどである。

ハイタッチとは、セラピスト、アーティスト、デザイナー、シェフなどである。

2．ハイテク＆ハイタッチなサービス産業の成否は、才能ある人材の確保と彼らの生活環境の質にかかわってくる。

3．彼らは、ハイセンスの消費（音楽、映画、芸術鑑賞、ファッション、家具、食事）を通じ、感性を磨き、才能の枯渇を防ぐ。

4．つまり、才能ある人材に依存する産業は、文化的な刺激に満ちた街に立地しなければならない。創造都市とは、彼らの創造性を発揮させることのできる条件を備えた街である。

創造都市では、ハイテク系の人材と、ハイタッチ系の人材、つまり才能ある個人が主役となる。ハイテク系とハイタッチ系との係わり方についてもう少し説明する。

ハイテク系人材とは、エンジニア、医師、研究者、プログラマーのような人を指し、ハイタッチ系人材とはデザイナー、セラピスト、アーティスト、シェフなどである。互いにミュージアムや、コンサートホールなどの文化施設とレストラン、ブティック、ホテルなどの消費施設に出入りする。ハイテク系の人材は、お金を使う側である。寄付をし、消費施設で、飲食、買い物を楽しむ。彼らにとって、この消費はいわゆる余暇を超えた存在

である。消費行動により、疲れを癒すだけでなく、そこから仕事のインスピレーションを得るのである。ハイテクは、ハイタッチを欲するのである。ハイテク分野でいい仕事をするには、ハイタッチなセンスが必要である。

一方、ハイタッチ人材の方は、文化施設や、消費施設に、表現の場を求める。ハイテク側から評価されることで、創造意欲をかきたてられる。自己実現の場を獲得すると同時に、収入も得る。ここに、ハイテク人材とハイタッチ人材との間に、互いが仕事をしていく上で、相手を必要とする、対等な関係が築かれるのである。

第２章　金沢の創造性について

＜金沢の創造性について＞

金沢創造都市性について、歴史、風土、経済発展の仕方などからの視点で見ることで、その理解を深めることにする。

【金沢市の概要】

金沢市は、北陸地方、石川県のほぼ中央に位置する都市。中核市であり、同県の県庁所在地である。江戸時代には、外様大名のなかでも最大の石高を誇る加賀藩（「加賀百万石」）の城下町として、江戸・大坂・京に次ぐ日本第4位の人口（約10万人）を擁する大都市として盛えた。第二次世界大戦で空襲を受けなかったことから市街地に歴史的風情が残り、小京都とも呼ばれる。

また、長年の都市文化に裏打ちされた数々の伝統工芸、日本三名園の一つとして知られる兼六園、加賀藩の藩祖・前田利家の金沢入城に因んだ金沢百万石まつり、さらに庶民文化（郷土料理の治部煮等）などにより、観光都市として知られる。

金沢市の人口は、約45万人。商圏規模は半径50km圏で約120万人とされている。「金沢」という都市名は、昔、芋掘り藤五郎が山芋を洗っていたら、砂金が出たため、「金洗いの沢」と呼ばれたという伝説による。

前田利家が尾山城（金沢城）を居城とし、加賀、能登、越中を合わせた百万石・加賀藩の原型が形成された。5代目藩主前田綱紀は名君として名高く、学者の招聘につとめ学問を振興するとともに、全国から職人を集め、蒔絵、金具、象嵌、陶器など工芸の振興にも力を入れるなど文治主義を徹底させた。その後金沢は150余年に渡り、加賀百万石の城下町として繁栄することとなる。美術工芸など現在に受け継がれる都市文化が花開いた。

明治22年4月1日、市制施行で金沢市となり、石川県の県庁所在地として、政治、経済、文化の中心として発展を続け、平成8年4月1日、中核都市となった。*2-1

*2-1 出典：フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』「金沢」
http://ja.wikipedia.org/wiki/

金沢市は、人口45万人のヒューマンスケールの都市である。伝統的な町並や、伝統芸能や伝統工芸を育む生活文化の営み、市内を流れる2つの清流と緑濃い周辺の山々とに囲まれた豊かな自然環境に恵まれると共に、独自の経済基盤を保持している。経済発展と文化・環境とのバランスの取れた中規模都市であり、内発的発展の視点から高く評価されている。

内発的発展をしてきた金沢の都市経済の特徴は、持続的に発展を遂げた中堅・中小企業が多数集積していることである。これらには、職人気質に富み、イノベーションを得意とし、独自技術を持ち“スキ間分野”でのトップシェアを維持する企業が多く、相互に刺激し合いつつ発展を遂げる自立性の高い都市経済をもたらしている。

歴史的には繊維工業と繊維機械工業とが地域内で相互連関的に発展を遂げ、近年には工作機械や食品関連機械、出版・印刷工業、さらにはコンピュータ関連産業が発展して多彩な産業関連構造を保持している。市民の「生活の質」を豊かに支える伝統産業や、食品工業、アパレル産業等も発展を見ている。

このような金沢経済の内発的発展が、外来型の大規模工業開発を抑制し産業構造や都市構造の急激な転換を回避してきたため、江戸時代以来の独特の伝統産業とともに、伝統的な街並や周辺の自然環境などを守り、アメニティが豊かに保存された都市美を誇っている。独自の都市経済構造が地域内で生み出された所得の域外への「漏出」を防ぎ、中堅企業のイノベーションや文化投資を可能にしたのである。

都市政策の各分野においても、金沢らしい文化的視点が貫かれている。第二次世界大戦後、いち早く市立金沢美術工芸大学を設立し、友禅や蒔絵などの伝統工芸や芸能の後継者育成やインダストリアルデザインの導入による工芸の近代化を担う人材養成に乗り出し、全国に先駆けて「伝統環境保存条例」を制定し、

伝統的町並み保存の全国的なリーダーとなった。

近年は、伝統文化の保存のみならず、新たな文化創造に向けて取り組んでいる。その中でも、注目をされているのが、「金沢市民芸術村」と、「金沢21世紀美術館」である。

【内発的産業構造を持つ街、金沢】

金沢市は、歴史的には伝統工芸品産業を継承しながら、繊維工業と繊維機械工業とが地域内で発展を遂げ、近年には、工作機械や食品関連機械、アパレル産業、出版、印刷工業、コンピュータ関連産業などが展開する多彩な産業構造を有している。金沢の経済の特徴は、大型企業誘致に見られる外来型の大規模工業開発を抑制し、前述の産業が内発的に発展を遂げてきたことである。

このような産業構造が、地域内で生み出された所得の域外への流出を防ぎ、中堅企業の絶えざるイノベーションや文化的投資を可能にしたといわれている。

金沢市は時代の流れと共に次第に衰退していく産業の遺産もうまく活用し、ジェイコブスの言う、「創造都市」に見られる、柔軟性に富む革新的な「修正自在型」の都市経済システムを持つ。

それが、繊維産業の衰退した跡に見られる、金沢市民芸術村である。1980年代後半から急速に進行したグローバル化の中で金沢の高度経済成長を担った繊維産業が衰退すると、金沢市は紡績工場跡と倉庫群を活用して、1996年9月に「金沢市民芸術村」をオープンさせた。金沢市長は、昼間働く市民にとって深夜でも使える施設にしたいという要望に応えるため「1日24時間1年365日」自由に使える施設した。4棟の倉庫はドラマ工房、ミュージック工房、エコライフ工房、アート工房に姿を変え、練習のみならず公園も可能な施設として修復された。運営面では、各工房に一般市民から選ばれた2人ずつ合計8人のディレクターたちが施設利用の活性化、事業の企画立案、そして利用者間の調整などを自主的に行なうという、全国的にも注目される市民参加型文化施設が誕生することになった。

これがきっかけで、ともすれば伝統文化や伝統芸能に傾斜しがちな金沢の芸術文化に転機が訪れたのである。市民の能動的

な参加によって「近代産業遺産」が「文化創造の場」に転化しようとしている。つまり。新たな文化的インフラストラクチュアが芸術の創造インフラストラクチュアに転化しようとしているのである。

【歴史的まちなみ保存】

金沢には、伝統・文化を重んじる風土がある。金沢市のまちづくりは、「保存と開発の調和」を目指している。

金沢市は、前田家が支配していた江戸時代の藩政期においても、学術・文化を尊重してきた。また、江戸時代から現在に至るまで、約420年以上もの間、戦禍にあわず古い歴史的街並みが残ったまちである。市民は、この歴史的景観と独自の伝統・文化を今でも大事にしている。市では、歴史的街並みの保存に努めようと、「都市景観条例」の制定、旧市街地の伝統空間とそれを取り巻く町家群を保存する「こまちなみ条例」（10地区指定）、街中を流れる辰巳用水や鞍月用水を再整備する「用水保存美化条例」兼六園から周辺の山々に連なる大地の樹木を保存する「斜面緑地保存条例」などを整備した。

金沢の街並みの「らしさ」を残す代表格として、金沢の春を代表するイベントに、浅の川園遊会 *2-2 がある。満開の桜の下、浅野川にかかる梅ノ橋のたもとの水辺に張り出した浮舞台の上で、泉鏡花の戯曲での水芸や、地元の青年らによる獅子舞や茶屋街の芸妓による色鮮やかな素囃子（すばやし）が演じられる。河川敷には料亭が茶店を出し、界隈ではお茶会、句会が開催され、伝統的な街並みの中での写生大会、ウォークラリーなど、数万人の市民と観光客が、金沢の伝統芸能や食文化を楽しんでいる。

今ではすっかり定着したこのイベントだが、そのルーツをひもとけば、もともと界隈の活性化のために、老舗の経営者４人が中心となり手づくりで始めたのがその起源である。

城下町、金沢の雰囲気を今に伝える寺院群と、加賀友禅と金箔の職人が住んでいた町家が並ぶ東山地区、そして金沢城大手門にいたる北国街道沿いに老舗の大店を構える尾張町一帯は、

*2-2 金沢・浅の川園遊会風景
写真は上から、
2-2-1 平成滝の白糸の上演
2-2-2 主計町の露店
2-2-3 浅野川大橋を中心風景
（写真は金沢・浅の川園遊会ホームページより）

都市再開発の波に乗り遅れ、衰退化の兆しが見え始めていた。

江戸時代につくられた狭い路地が続く界隈は、マイカーの普及した現代の都市生活に適合できなかったのである。そして、世代交代と共に住民は郊外に移り住み、空き家となった町家が駐車場となり、次第に高層マンションの数が増えていったのである。

「このままでは金沢の原風景が失われる。この界隈のもつ『金沢らしさ』を後世に伝えなければ。」と危機感を抱き行動に移したのが、金沢の名産品、佃煮の製造販売を営む佃一成氏であった。彼は、幼なじみである友人である米沢修一氏（老舗製茶屋）、蚊屋八郎氏（金箔問屋）、中村驍氏（宝飾業）に声をかけ「老舗・文学・ロマンの街づくりを考える会」を結成し東山・尾張町周辺の「界隈おこし」に着手したのである。この界隈には泉鏡花の生家跡があり、鏡花文学を生み出した鎮守の森と遊郭と迷路のような路地がつくる独特の雰囲気が残っており、それを「ロマンの会」という名に込めている。*2-3

かくして「ロマンの会」は発足し、浅野川の清流に親しみつつ、界隈の伝統芸能を楽しみながら伝統的街並をまもり、そして老舗の活性化をはかるという「浅の川園遊会」という粋な企画が誕生したのである。

この会の功績はまだほかにもある。1986年、園遊会の会場として予定されていた浅野川右岸（北側）に、バブル経済の余波を受け、東京の大手資本による高層マンション計画が突如として持ち上がった。そこで、彼らは浅野川大橋から卯辰山を見上げる景観の美しさと伝統的街並みをまもるため「都市景観トラスト」運動を展開し、広範な市民の支持を背にこれを阻止したのである。伝統文化と街並みを守りたいという町衆の熱意がひとつになった結果である。これを機に、それまでは一部の研究者や文化人が唱えていた金沢の都市景観を守るべきだという意見が、広く支持され、市民の間に広まっていくのである。

*2-3 佐々木雅幸「創造都市への挑戦―産業と文化の息づく街へ」岩波書店　2001/06　p.108

最初は4人ではじめた取り組みが、今では400人に膨れ上がり、園遊会前後の浅野川の清掃活動も恒例行事となった。そして、あらたに「金澤東山街づくり協議会」も結成され、町衆文化の拠点であった芝居小屋、浅野川演舞場の再建など伝統文化の息づく街づくりを目指している。

【伝統文化の継承＝人材の育成】

金沢市では、未来の担い手である子供たちに伝統文化を引き継ごうと、加賀宝生、素囃子、工芸（金箔）、瓦葺き、加賀野菜、和菓子などの分野で、「子ども塾」や「職人大学校」、「農業大学校」を設け、各方面の伝統文化の継承に力を入れている。

最近では、伝統文化の保存に加え、日本初のプロの室内楽団であるアンサンブル金沢を設立（1988 年）、金沢市民芸術村（1996 年開設）、金沢 21 世紀美術館（2004 年開館）するなど、新しい文化の創造にも力を入れている。*2-4

『オーケストラアンサンブル金沢』

この取り組みの特徴は、文化ホールなどのハード事業より芸術創造のソフト事業をゆうせんしたところにある。

そこには、伝統的和風文化のみならず、西洋音楽の文化土壌を耕そうという意図があった。石川県と金沢市が 1988 年に日本を代表する指揮者、岩城宏之氏の協力を得て設立させた、日本初の室内楽中心のプロオーケストラである。モーツァルトの交響曲演奏や、現代音楽にも意欲的に取り組み、創立 10 年を経て、演奏の水準の国際的評価も高まり、専用の音楽ホールが出来た。

『金沢市民芸術村』*2-5

金沢市は、旧大和紡績の工場跡地を買い取り、その倉庫４つを金沢市民芸術村（1996 年９月開設）として、「24 時間、365 日」利用できる芸術活動の拠点とした。倉庫はそれぞれドラマ工房、ミュージック工房、エコライフ工房、アート工房として、練習や公演も可能な文化施設として整備された。

運営は、一般から選ばれた８名のディレクターたちで、施設利用の活性化や独自事業の企画立案、利用者調整などを自主的に行う市民参加型文化施設となった。開設以来、多くの市民や

*2-4 佐々木雅幸　「創造都市への挑戦ー産業と文化の息づく街へ」　岩波書店　2001/06　p.130,135

*2-5 金沢市民芸術村の施設（一部）
写真上から
2-5-1 マルチ工房
2-5-2 ドラマ工房
2-5-3 パフォーミングスクエア
2-5-4 アート工房
（金沢市民芸術村公式ホームページより）
http://www.artvillage.gr.jp/index.html

民間団体に利用されており、2004年度は、16,668団体、184,995人が利用した。また、敷地内に金沢職人大学校を併設しており、建築の歴史、文化財の保存、修復に関する知識や技術などを教えている。

『石川県勧業試験場・金沢工業高校』

ノウハウや技能の保存・継承・革新という点でより重要なことは、1876年に石川県勧業試験場（現在の石川県工業試験場）と、1887年には金沢工業高校（直接の後裔は現在の石川県立工業高等学校だが、その理念は金沢市立美術工芸大学にも引き継がれている）とが、いずれも全国に先駆けて設置されていることである。

石川県勧業試験場は、日本で最初の公設試験場であり、加賀藩時代に蓄積された種々の工芸に関する技能の保存、育成革新を目的としていた。金沢工業高校は、金沢に美術学校を設置しようという市民の要請運動を受け、明治政府から派遣されて九谷焼の指導に当たっていた納富介次郎が創設した、日本初の工業学校であった。

この学校の目的は美術工芸の近代化を通じて地域振興に貢献するというものであったが、美術学校でなく工業学校としてスタートを切ったことは特筆すべき点である。つまり、日本で最初に工業デザイン教育を志向したということである。その背景には、高級な美術工芸では市場が限定されてしまうので、工業デザインを導入することで世界に対抗できる産業にしようという思惑があった。

その後、1920年には金沢高等工業学校（現在の金沢大学工学部）、1924年には金沢市工科学校（現在の金沢市立工業高等学校）が設立され、地方都市としては屈指の多様な教育・研究機関が集積し、地域固有の「ものづくり」を支える「制度的厚み」を形成し、人材育成を通して製造業の内発的発展に大きな役割を果たしてきたのである。

【金沢の創造都市性】

金沢市は、兼六園などの美しい歴史的景観を有し、北陸の小京都、あるいは歴史的観光都市と呼ばれている。また、京都に次いで伝統的工芸品産業が多く継承されている都市であり、「加賀友禅」「九谷焼き」をはじめ２６業種の伝統産業があり、多くの市民がこれらの産業に従事している。

最近では、古くなった紡績工場の煉瓦造りの倉庫を 24 時間、365 日市民が自由に芸術活動に利用できる「金沢市民芸術村」に再生したり、旧石川県庁跡地を「金沢 21 世紀美術館」として小学生から現代美術に親しんでもらう取り組みを行ったりするとともに、金沢の伝統産業や文化の継承にも全市を挙げて取り組んでおり、「日本の創造都市」の代表的な事例としての評価が高まってきている。

高度成長期において日本の地方都市の多くが大量生産＝大量消費の波に押し流されて、「効果的な生産現場」に姿を変え、その結果、伝統工芸や生活文化の「創造の場」を喪失していった中にあって、極めて個性的な都市文化と自律的な都市経済を金沢にもたらしたのが内発的発展と呼ばれる独自の発展方式である。

幾度もの転機と危機を乗り越え内発的発展をしてきた金沢の都市経済の特徴を次頁にまとめる。

『金沢の都市経済の特徴』

1．巨大企業はないが、本社や研究開発機能を備えた主力工場を地域に置き、持続的に発展を遂げた中堅・中小企業が多数集積していることである。これらの中には職人気質に富み、イノベーションを得意とする企業が多く、相互に刺激し合いつつ発展を遂げている自立性の高い都市経済をもたらしている。

2．明治中期以来、約一世紀に渡って消費財産業としての繊維工業と、それに生産財を供給する繊維機械工業とが2つの基幹工業として地域内で相互連関的に発展を遂げたことである。これを基礎にして、戦後には工作機械や食品関連機械、さらには出版・印刷工業、食品工業、アパレル産業などが展開しており、人口45万人の都市にしては多彩な産業連関構造を保持し、同時に伝統産業からハイテク産業にまで至る地域技術とノウハウの蓄積とその連関性も保持されてきた。

3．繊維工業に典型的に見られるように、地元の産元商社を中心とする独自の産地システムを形成し、繊維産業の製造機能のみならず販売・流通機能、そしてそれベースにした金融機能が域内で発展していくことによって二次産業と三次産業のバランスのとれた都市経済になっている。

4．このような都市経済の内発的発展力が、外来型の大規模工業開発やコンビナート等の誘致を結果として抑制し、産業構造や都市構造の急激な転換を回避してきた。このことが幕藩体制以来の独特の伝統産業とともに伝統的な街並みや周辺の自然環境などをまもり、アメニティが豊かに保存された都市美を誇っている。

5．以上のような内発的発展がもたらした独自の都市経済構造が域内でさまざまな関連性を持った迂回生産によって付加価値を増大させ、地域内で生み出された所得のうち、利潤部分の域外への「漏出」を防ぎ、そのことが中堅企業の絶えざるイノベーションを可能にした。

6．情報産業や各種のサービス業を発展させ、さらに大学（金沢大学、金沢美術工芸大学、金沢工業大学等13大学）や専門学校、多数の博物館や資料館等の学術文化集積をもたらして独自の質の高い都市文化の集積を誇っている。結果として、経済余剰の都市内循環により「文化資本」が高く保持されている。

金沢の「創造都市性」とは、「文化的生産」の街を目指すところに集約されるように思える。金沢市の都市の文化資本の質を高め、創造性あふれる人材を育成し、集積させ、経済的価値と文化的価値の両立する財やサービスを生産して都市経済の発展を目指す方式は「文化資本を生かした都市の文化的生産」と定義できる。

金沢が目指す「文化的生産」とは、図のように、生産工程では職人的技能や感性とハイテク機器の結合によって文化的付加価値の高い財やサービスを生産し→生活財産業からメカトロ産業、ソフトウェア・デザイン産業にまで至る地域内発型企業の緊密で有機的な産業関連構造を構築することによって→地域外から稼いだ所得が地域内で循環するとともに→これが新たな文化的投資と文化的消費に向かい、文化的投資は、美術館や民間のデザイン研究所の建設、オーケストラなどの運営を支援し、都市の文化資本を高度化することによって、文化的生産の担い手となるハイテク・ハイタッチの創造的人材を養成し、地域に定着させ→文化的消費は文化性・芸術性に富んだ財やサービスを享受する能力を持った生活者を育てることにより、地元の消費市場を高質化し、高感度商品への需要を喚起するような、文化的消費と一体となった生産＝消費システムである。

金沢における「文化的生産」は、ある意味において、江戸時代に始まった職人的生産の復活と再構築と言える。職人的生産（クラフト・プロダクション）→フォーディズム（マス・プロダクション）→文化的生産（新しいクラフト・プロダクション）という歴史的展開の中に位置づけられる。

このような金沢市の創造都市戦略は、1990年代後半から地元の経済界や、市民たちで構成する金沢経済同友会の40周年事業として企画された金沢ラウンド会議が元になり練り上げられたものである。

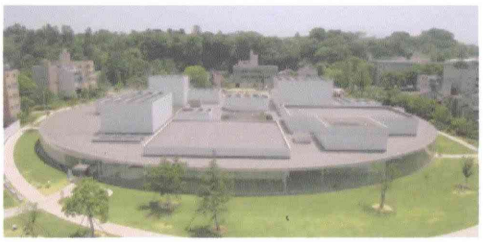
つまり、市民や経済界など、草の根からの動きが都市自治体を巻き込んで展開しているところが、金沢の特徴的な創造都市の基盤となっているのである。

これまで見てきたように、金沢市は、歴史的街並みを保存し、伝統・文化・伝統工芸産業などを昔から大事にしてきた。また、その産業構造による内発型発展により、域内でのイノベーションに対する投資が進んだ。

現在、金沢市独自の伝統・文化・伝統工芸産業を後世に継承するための取り組み、新しい文化による次世代人材の創造にも力を入れていることかが分かった。早くから美術工芸大学を全国に先駆けて市が設置するなど、金沢市には、昔からまちぐるみで人材を育てる風土がある。

また、市立美術工芸大学の卒業生や郷土出身者の作品については、美術館で積極的に展示しており、市民みんなで、郷土の文化を育て、応援していく。このような取り組みによって、金沢の伝統文化の末永い継承がなされるとともに、新しい感覚の市民による創造都市づくりが進むと思われる。

第３章 金沢２１世紀美術館とは



*3-1 金沢21世紀美術館
（写真は公式ホームページより）

＜金沢21世紀美術館とは＞

この章では、金沢21世紀美術館*3-1の経緯、概略、機能、金沢市の文化政策との関わりやその背景を中心に見ていくことにする。

【注目の的の美術館】

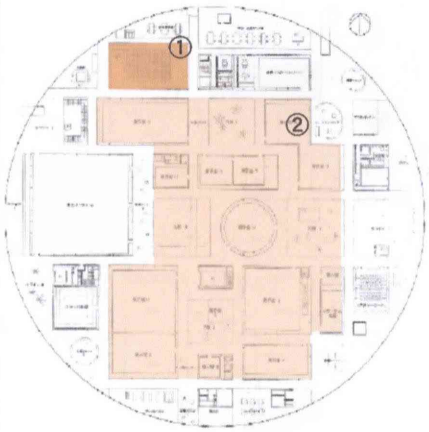
2004年に開館した現代美術の「金沢21世紀美術館」は、全国の文化政策に携わる行政担当者たちが全国から視察にくる希有な文化施設である。町の中心部、香林坊や市役所にも程近く、市内最大の観光地「兼六園」に隣接する芝生の中に、まるいガラス張りの美術館が建っている。建物を囲む塀もなく、開放的な地上4カ所の入り口から、子供連れやカップルたちが訪れる姿でいつも賑わう、新しいタイプの美術館である。特別展等の有料ゾーンが建物の真ん中にあり、その周囲の空間は無料で楽しむことができるフリーゾーンとなっているため、気軽に入りやすい。芝生に面したカフェレストランやミュージアムショップもゆったり配置されている。その他、一般向けに貸し出す「市民ギャラリー」などがある。

【美術館の機能】

美術館の内部には、展示スペースの他、様々な機能を持つ施設を内包している。ここではその施設の記述をする。

①展示室
部屋の大きさや高さ、プロポーションが異なる。作品の個性に合わせた展示が可能。
コレクション展示室（展示室１～６）
６室、763.1 ㎡、高さ４～ 11.9m、一部トップライト採用
特別展示室（展示室７～ 14）
８室、1,293.6 ㎡、高さ 3.7 ～ 11.9m、一部トップライト採用
②シアター２１
芸術交流活動の拠点として、演劇、コンサート、パフォーマンス、講演会やシンポジウムだけでなく、新しい映像表現や舞台表現の展開が可能な多目的ホール。
*3-2

①展示室
②シアター２１



*3-2 金沢 21 世紀美術館平面図

*3-2 ～ *3-5 出典：二川幸夫 「妹島和世＋西沢立衛読本 2005」 ADA EDITA Tokyo 2005/1

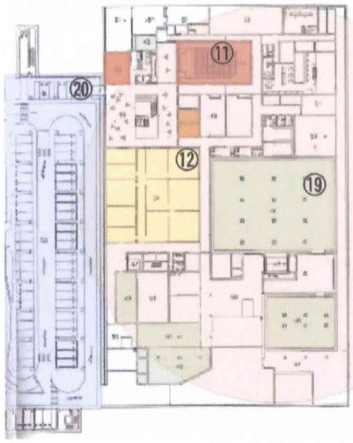
③市民ギャラリー
④プロジェクト工房
⑤レクチャーホール
⑥デザインギャラリー
⑦アートライブラリー
⑧キッズスタジオ
⑨茶室
⑩長期インスタレーションルーム

*3-3 金沢21世紀美術館平面図

*3-2～*3-5 出典：三川幸夫「妹島和世＋西沢立衛読本2005」ADA EDITA Tokyo 2005/1

③市民ギャラリー
1,458㎡で国内最大級の規模。市民の創作活動の発表や鑑賞の場として、絵画、彫刻、工芸、書、写真、映像、生け花など、幅広い作品を展示できる。（貸し会場）
④プロジェクト工房
美術館本体に隣接している、スタジオ型のスペース。鑑賞の場としての美術館機能だけでなく、ここでは創造の場としての機能を併せ持っている。防音も考慮してあり、24時間作業が可能で、アーティストが滞在制作を行う環境がある。
⑤レクチャーホール
96席の固定席と防音、遮光性能を持つガラス壁のホール。映像資料の公開、作家の講演会等の会場として利用が可能。
⑥デザインギャラリー
アートだけでない多様な価値観と表現を展開するデザインを様々なプログラムを通して発信して行く場。
地域産業活性の場を目指し、地元企業と協力したプログラムを行い、商品企画や流通ルートの開発のための情報交換の場としても利用。
⑦アートライブラリー
美術、建築、ファッション、音楽、デザイン、ダンス、写真、映画関係の資料等が閲覧可能。国内外の展覧会カタログ、アーティストの作品集、最新の映像作品も鑑賞でき、インターネット検索による情報入手も可能。
⑧キッズスタジオ
親子や子供同士で気軽に立ち寄って遊べる空間。また、子供が主体の作品制作や芸術体験をするワークショップも行われる。
⑨茶室
敷地内に移築された松涛庵と山宇亭、腰掛待合を茶室として利用できる。貸し施設として利用可能。
⑩長期インスタレーションルーム
長期的なインタレーションを行う際、このスペースを利用する。
*3-3

⑪メディアラボ
⑫会議室
⑬ミュージアムショップ
⑭カフェレストラン
⑮情報ラウンジ
⑯託児室
⑰学芸・交流スタッフ室
⑱事務室
⑲収蔵庫、倉庫
⑳駐車場



*3-4 金沢21世紀美術館地下平面図

*3-5 金沢21世紀美術館平面図

*3-2～*3-5 出典：二川幸夫「妹島和世＋西沢立衛読本2005」ADA EDITA Tokyo 2005/1

⑪メディアラボ
メディアラボは、主にコンピュータを用いての創作活動や発表を含めたアート活動をサポートする施設。パソコンや様々な周辺機器を用意し、制作するだけでなく人に教えるためワークショップにも使用可能。
⑫会議室
市民ギャラリーやシアター21の利用者の打ち合わせや研修などに利用できる。
（会議室単独の利用は不可）
⑬ミュージアムショップ
⑭カフェレストラン
⑮情報ラウンジ
⑯託児室
⑰学芸・交流スタッフ室
⑱事務室
⑲収蔵庫、倉庫
⑳駐車場
主に、これらの機能をこの美術館はもっている。さらにコミッションワークも館内と館周辺にあり、そこに訪れた人に対して充実したサービスを提供できる美術館である。①～⑫までは、美術館活動の主となるスペースであり、⑬～⑰、⑳はそれらの活動をより活発にさせたりするサブスペースであり、⑲を含め地下の残りのスペースは、バックヤードである。*3-4,*3-5

【開館までの経緯】

構想の当初は、美術館と交流館の２つの建物を敷地内に配置することがイメージされていたが、設計コンペの際に、建物の中心に美術館を配置し、その周囲に交流機能を配置する２つの施設を一体化した建物が提案され、より交流の相乗効果が得られるということで採用された。

また、学芸員、建築家、行政、アーティストが意見をやりとりしてつくった、使う側の意見に基づいた建物になっていることも大きな特徴である。通常は建物の設計ができあがってから、学芸員が入ることが多いが、この美術館の場合は、開館の５年前から専門家としての学芸員が募集され、美術館の基本コンセプト、プログラムや収蔵品の内容などを建物に反映するように、建築家と協動し、現在に至った。

これは80、90年代に作られた多くの美術館が、建築家の作品として完成されている反面、使う立場の人間の声が反映されていないという反省点を改善したいという金沢市の判断による。

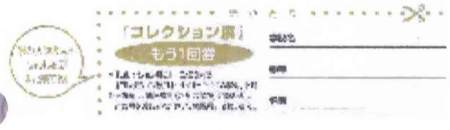
【美術館のコンセプト】

運営面での最大のコンセプトは、「まちに開かれた公園のような美術館」を目指していることである「誰でも気楽に」をモットーに、子どもからお年寄りまであらゆる世代の人を対象としているが、とりわけ子どもに力点をおいている。

開館初年度に市内小中学生4万人を送迎付で招待する「ミュージアム・クルーズ」を実施した。これは単純に入館者を増やしたいという思いと、子どもの時に本物の美術作品に触れることで感性を養っていくことの重要性の大きく2つの点から発案したものである。

また、子ども楽しいと思うと親に話し、親とおじいちゃん、おばあちゃんを連れて来館する可能性が高い。「ミュージアム・クルーズ」で配った子ども専用パンフレットの中に「もう1回券」(無料券)*3-6を入れたところ、7000枚が返ってきた。4万人のうち、7000人の子どもたちが再来場したことになる。これに両親等が一緒に来ていれば相当な入場者となる。*3-7

2年目からは、小学4年生だけを対象にした。また、小中学生については、極力無料にしている。常設展は無料。企画展であっても遠足、修学旅行、社会科見学などの行事で来館する場合は、県外の小中学生でも無料である。



*3-6「もう1回券」
(出典：吉備久美子, 木村健 「ミュージアム・クルーズ：活動記録集：金沢市内小学4年生全児童招待プログラム」 金沢21世紀美術館　2007/03　p.15

*3-7 蓑豊 「超・美術館革命ω金沢21世紀美術館の挑戦」 角川グループパブリッシング　2007/05　p.40

【美術館の建築の特色】

美術館の建築コンセプトとして「まちに開かれた公園のような美術館」があげられている。郊外や高台に鎮座していることが多い従来の美術館に対して、街中にあって、誰もがいつでも立ち寄ることができる、「気軽さ」「楽しさ」「使いやすさ」をキーワードにした、美術館を目指している。*3-8

建物の大きな特徴は、直径113mの円盤形というユニークな形状である。円は正面や裏表の区別がなく、どこからでも内部に入ることができるということで採用された。敷地内には美術館を回遊する小道が設けられていて、東西南北4つの入り口がある。

館内は有料の美術館スペースを真ん中にし、その周囲をぐるりと一周するように無料スペースが取り囲んでいる。建物の外壁の全てと、内壁の多くは、透明のガラスでできていて、非常に明るく開放的であるとともに、建物の外部、建物内部の有料スペース、無料スペース、互いに異なる空間にいるもの同士が、それぞれの様子や気配を感じられるようになっている。

*3-8 金沢21世紀美術館建設事務局「金沢21世紀美術館」金沢21世紀美術館建設事務局 2002 p.3

無料スペースには、国内最大級の1,458㎡もの市民ギャラリーや、演劇やコンサートにも使えるシアター、子供用のプログラムが行われるキッズスタジオ、託児ルーム、専門の図書室、カフェレストランなどが備えられている。さらに、休憩する場所や、美術館の主要収蔵作品のいくつかも配置されている。公共の施設としてはめずらしく年末年始以外、無休で夜10時まで開いており、勤め帰りや買い物帰りにも気軽に立ち寄ることができるようになっている。

*3-9 無料スペースの一角　壁と椅子も加賀友禅をモチーフにした収蔵作品

*3-10 図書室の様子　透明の外壁から外の風景を眺める

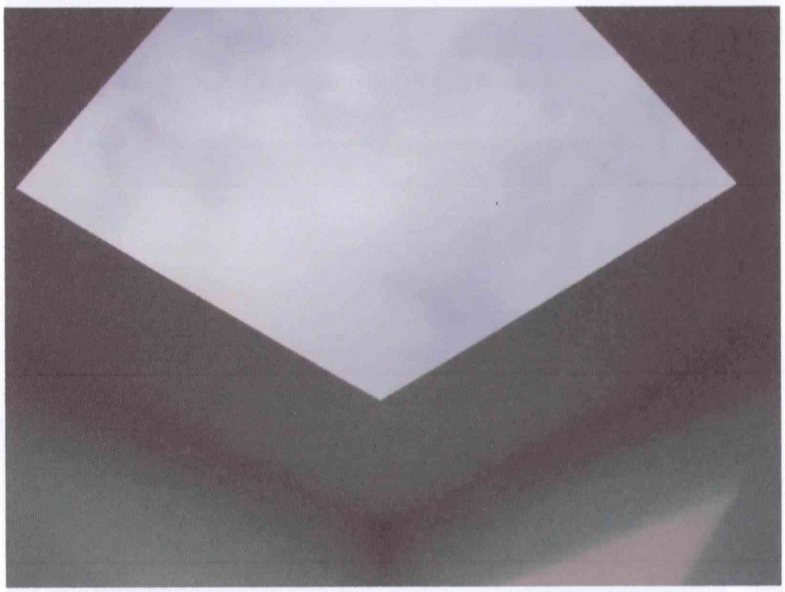
*3-9,*3-10 2007年撮影

【コレクション】

５年間で収集された美術品は 200 を越えている。
収集の基本方針は
１．“現代（いま）”に連続する美術表現の転回点となった 1980 年以降に制作された新たな価値観を提案する作品
２．　１．の価値観に大きく影響を与えた 1900 年以降に作られた作品
３．　金沢ゆかりの作家による、現在を中心とする、近現代の新たな創造性に富む作品となっている。

また、建物内や広場には、コミッションワークと呼ばれる建築と一体化した作品が多く設置されているのも特徴である。

例えば、コミッションワークの一つは、ジェームズ・タレルの部屋「ブループラネットスカイ」。光をテーマにした空間作品で、天上部分に穴があいており、空を作品の一部とすることで、静寂で光に満ちた体験型スペースとなっている。無料ゾーンの常設の作品である。



*3-11 2007 年撮影

*3-11「ブループラネットスカイ」天候、時間によって違う風景を見せる

「スイミングプール」は、光庭と呼ばれる中庭にあり、一見本物のプールに見えるが、のぞきこむと水面の下に人の姿が見える。実はプールに張られた強化ガラスの上に10cmほどの水があり、その下に水色の小部屋がある仕掛けになっている。来館者はプールの外側と内側、さらに光庭の外側からのプールの眺めと3つの視点から作品を眺めることになる。

*3-12「スイミングプール」の外側から中の人々を見る鑑賞者

*3-13「スイミングプール」の内側から外の人々を見る鑑賞者

*3-12*3-13 2007年撮影

【金沢の文化政策との関わり】

前の章でも触れた通り、金沢は、前田家の城下町として整備され、栄えた街である。戦をせず、江戸期以降は加賀百万石とうたわれ、代々の藩主は学術と文化に力を注いだとされている。金沢の伝統文化といえば、加賀宝生の能楽や茶の湯といった芸事、金箔や漆などの工芸品、加賀料理や和菓子などが代表的なものだが、こうした文化は明治以降も人々に引き継がれていった。第二次世界大戦で我が国は戦禍を被り、地域によっては貴重な文化遺産をことごとく失ったところもある。幸い、金沢は空襲を受けることなく終戦を迎え、街並みも文化的資産も損傷を受けることがなかった。

現在、金沢の街を訪れると、金沢駅の西側から金沢港へかけてのゾーンは近代的な整備が進む一方、駅の東側は「兼六園」などの個別の観光地だけでなく、「ひがし茶屋街」や街中を流れる「用水」といった日常の街並みの中に美しい伝統が息づいているのを目の当たりにする。

こうした、伝統を残すことと、新しい時代にキャッチアップして先進的なエリア開発を進めることとをいずれも戦略的に進めるまちづくりは、「伝統と創造」という金沢市のコンセプトに基づくものだと言えるだろう。

金沢市では、1995年にスタートした「金沢世界都市構想」（世界に向けて、その存在や個性をアピールできる都市を目指したまちづくり）を市の基本政策としている。この構想においては「文化」を中心にした新たな都市像や都市と世界との新しい関係が提起されており、「文化」の要素として次のふたつが挙げられている。

1）伝統文化の保存・継承

市民文化の中に息づいている伝統文化をさらに継承・発展させ、国内はもとより世界との文化交流を深め、文化都市金沢としての厚みを増していく。

（2）新文化の創造・発信

金沢の文化に一層の奥行きと広がりを求めるため、新たな文化活動を営み、伝統文化と新文化が共存する文化都市金沢を世界に発信していく。

文化政策もこれに基づくものであり、金沢という街のアイデンティティとして、古きよき伝統的な文化を大切にしていくことは重要だが、「伝統文化を活かした元気のあるまちをつくっていくためには、ただ文化を残して行くだけでは不十分である。」というのが市の基本的な姿勢だという。「伝統を真に伝統たらしめるのは絶えざる創造」であり、「伝統文化は革新を通じてこそ発展し、革新の営みを忘れたとき伝統文化は衰退する。」という市長の思いがあると言う。従って、金沢市の文化施策には、伝統文化の継承・高揚を目的とするものと、新しい文化を創出するものとがバランスよく配置されている。また、次代を担う子どもたちがこうした文化を継承・創造していくことを目的とした施策として、現代美術の「金沢21世紀美術館」は位置づけられている。

【美術館設置の背景】

「金沢21世紀美術館」が「新たなまちの賑わいの創出」を目的に掲げるに至った背景には、中心市街地の空洞化問題がある。

そもそも美術館は金沢大学教育学部附属小中学校の跡地利用計画として構想された。このエリアは古くから金沢の中心エリアだったが、金沢大学と石川県庁が郊外に移転することが決定した後、「石川県新庁舎整備並びに跡地利用構想懇話会」の提言を受け、1995年、県と市により「都心地区整備構想検討委員会」が設置され、美術館を中心とする交流施設の設置が検討された。

中心市街地活性化がテーマとなるエリア開発の核となる施設として現代美術の美術館が設置されたのは、前述のように、まちづくりのキーワードに「文化」を掲げ、しかも伝統文化だけでなく新文化の創造を両輪に掲げる文化政策をとる金沢市ならでは、と言える。なお、すぐ近くに、1959年開館の石川県立美術館があり、こちらは伝統的な美術工芸品を中心に収蔵する美術館であることもあって、新しい市立美術館は現代美術の美術館となった。

金沢大学は既に1995年に郊外に移転を完了しており、2003年に石川県庁が移転を完了した時には、それまで来庁者を含めて5000人いたとされる県庁の昼間人口が一挙になくなり、金沢都心部は以前に比べて閑散とし、商店街の人通りも落ち込む結果となっていた。

「この美術館は、社会教育施設としての機能だけではなく、兼六園など周辺施設との一体利用の観光施設として、また、まちの賑わい創出という都市整備の面を持つ施設である」（「金沢市中心市街地活性化推進委員会」資料より）と明示されているように、「金沢21世紀美術館」はまちの賑わい創出の起爆剤となることが期待されていた。

【金沢21世紀美術館】

「金沢21世紀美術館」は、全国の公立美術館が軒並み予算を削減され存在意義を問われる中、開館した。美術館の目的には、当初から、「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」が掲げられた。文化振興に加えてまちづくりの核としての役割も期待されていたのである。

現代美術は集客力がない、伝統の街金沢になぜ現代美術なのか、といった声もあったが、当初の年間入場者目標30万人を2ヶ月で達成し、想定以上の来場者で賑わった。

また、その様子が新聞やテレビで多くのニュースに取り上げられるなど、芸術文化領域のトピックとしてだけでなく、ひとつの社会現象として大いに注目された。数年前に県庁が移転した後、来街者数が大きく落ち込んでいた地元商店街にも活気が戻り、経済波及効果は328億円と推計されている。*3-14 美術館設置に際して、当初掲げられた目的は、現在までのところ十分に達成されていると言える。

*3-14 総事業費113億円、管理運営費7億4千万円に対して、経済波及効果328億円、建設に伴うものを除いても111億円と推計される大きな影響をもたらした。
（データ出典：「金沢市中心市街地活性化推進委員会」資料より）

第４章　金沢 21 世紀美術館と周辺環境とのかかわり方

<金沢21世紀美術館と周辺環境とのかかわり方>

“金沢21世紀美術館”と“周辺環境”の関わり方、相互間に生まれた効果を見るため、事業経緯と現状について見ることにする。

まず、“金沢21世紀美術館”は、どのような意識で、“周辺環境”と関わろうとしていたのかを見てみよう。

【ミッション・ステートメント】

金沢21世紀美術館では、美術館は自ら、「意思」を持つべきだという考えに基づき、専門コンサルティング・ラボ社（村井良子代表）と共に、戦略計画を2002年度に策定した。その戦略計画＝ミッション・ステートメントを次頁に示す。

「金沢21世紀美術館のミッション・ステートメント」*4-1

<存在意義（役割）>
金沢21世紀美術館は、まちと共に成長し、「新しい文化の創造」と「新たなまちの賑わいの創出」に資するために存在します。そのために4つの役割を果たしていきます。
・今起こりつつある美術表現の現在（いま）と向き合える場をつくり出すこと
・様々な交流や人々の参画を生む触媒（仲立ち）となること
・世界性を持った地域固有の文化を創造・革新する場となること
・未来を創り出す子どもたちの感性と創造力を育む場となること

<目指す方向性（特徴 / ビジョン）>
金沢21世紀美術館は、同時代性・参加性・世界性・可能性の4つの方向性を持つ美術館を目指します。
・同時代性：世界の「現在（いま）」とともに生きる美術館
・参加性：まちに活き、市民とつくる、参画交流型の美術館
・世界性：地域の新しい伝統を創造し、世界に開く（発信する）美術館
・可能性：子どもたちとともに、成長する美術館

<行動指針（価値観）>
金沢21世紀美術館は、次の3つを大切にした、これまでにない、美術館を目指します。
・気軽さ、楽しさ、使いやすさがキーワードの美術館
・わくわくする心と出会いにあふれた美術館
・成長のためには改善や変化を恐れない美術館

ミッションは美術館が世界に向かって主張するアイデンティティであり、たかが文章ではあるが、大きな力をもたらす。
さらに、戦略計画をたてた次は、戦略目標を設定し、それにともない戦略（＝行動課題）も立案している。金沢21世紀美術館の場合は、「見るだけ」の美術館から「参加する」美術館へということを戦略目標のひとつに掲げている。その戦略目標を次頁に示す。

*4-1 出典：金沢21世紀美術館ミュージアム・アイデンティティ計画 /MI計画ならびに事業計画（2003年3月）から抜粋

「金沢21世紀美術館の戦略目標」*4-2

部門	事業・業務	戦略目標
使命 ― 事業活動	事業領域	現代を中心とする幅広い美術館事業を核とし、交流事業（芸術交流・地域創造）を加えた事業領域で、美術館の新しい存在価値を創造する
	美術館事業	世界の「現在（いま）」の美術表現を担う、発現者となる
	交流事業	現代の芸術表現の特性を活かし、周辺の文化を含む幅広い領域を扱う美術館となる
		「見るだけ」から「参加する」美術館となり、持続的な賑わいを生み出す
		地域産業に新たな視点を与え、活性化を図るためのコーディネーションの場となる
経営活動	運営主体と事業体系	金沢21世紀美術館・金沢市民芸術村等からなる複合財団のメリットを発揮させる
	経営構造	弾力的かつ柔軟に対応できる制度の運用や、自助努力による財源確保の仕組みの構築によって、美術館経営のリーディング・モデルとなる
	美術館の組織体制	参画交流型・地域創造型の美術館となるため、地域や支援者、外部のアーティストとのつながりを継続的に保持できる組織体制を整備する
	利用体系	いつでも気軽に行ける・活用できる美術館、心地よいサービスが受けられると市民から評価される美術館となる
	コミュニケーション戦略	パブリック・リレーションズによる社会との良好な関係づくりが当面の課題。そのための、効率的かつ有効な方策を早期に確立する
	目標管理と評価・改善	市民／利用者の満足度をより高め、美術館と職員が成長発展できる独自の評価システムを実現する

*4-2 出典：金沢21世紀美術館ミュージアム・アイデンティティ計画/MI計画ならびに事業計画（2003年3月）から抜粋

ここまでの、ミッション・ステートメント、ミュージアム・アイデンティティを通し、金沢21世紀美術館が初期の段階で、その場所で、どのような意識で関わりを持つか、役割をどう自覚しているのかがわかる。これらから見る、金沢21世紀美術館の主だった特徴は、ミュージアム・アイデンティティの、「目指す方向性（特徴／ビジョン）」の中の<参加性>である。ここでは、21世紀の美術館には、教育・創造・エンターテイメント・コミュニケーションの場など、新たな「まちの広場」としての役割が必要である、という、意思表明をしている（少なくとも金沢21世紀美術館は、それを核とした事業展開を行おうとしている）のである。これは、市民や産業界など、様々な組織と連携を図り、全く新しい美術館活動を行うことで、結果として、ただ単に多くの来館者を集客するのではなく（外部地域のお客さんのみをターゲットにするのではなく）、地域と連携し、地域への波及効果が高い集客力を目指すということである。

【プレ・イベントの実施】

そこで、金沢21世紀美術館は教育・創造・エンターテイメント・コミュニケーションの場など、新たな「まちの広場」としての役割を担うべく、美術館の誕生の前から、美術館が発信するアイデンティティを、プレ・イベントというカタチで、金沢市民に向けてのアピールしている。

また、プレ・イベントを行う背景には、現代美術の美術館と決まった当初、一般的に、現代美術というと「難しい」「わからない」、或いは「ガラクタのようだ」というようなイメージを抱かれていた。さらに印象派の絵画などのように好まれやすいジャンルとは異なり、当初は、「現代美術で集客できるのか」、「そもそも市が税金を投じて収集する価値があるのか」、といった疑問を抱く市民や地元の人たちも多かったという背景もあり現代美術を紹介するという意味でもプレ・イベントの必要性が出てきたのである。*4-3

そこで、開館に先立ち、プレ・イベントを市内各所で積極的に開催し、市民に現代美術に親しんでもらうと共に、新しく開館する美術館の広報活動を行ったのである。

*4-3 蓑豊 「超・美術館革命4金沢21世紀美術館の挑戦」 角川グループパブリッシング 2007/05 p.80

＜プレ・イベント vol.00～vol.18＋α＞ *4-4

*4-4 プレ・イベント vol.00～vol.18＋α
（文献および写真＝
出典：鷲田めるろ，大森美代子　「金沢市現代美術館プレ・イヴェント記録集，1999年度」金沢市現代美術館建設事務局　2001/03
鷲田めるろ，大森美代子　「金沢21世紀美術館プレ・イヴェント記録集，2000年度」　金沢21世紀美術館建設事務局　2002/03
金沢21世紀美術館建設事務局　「金沢21世紀美術館活動記録集，2001年度」　2002/09
金沢21世紀美術館建設事務局　「金沢21世紀美術館活動記録集，2002年度」　2003）

00

1998年10月25日～11月8日
プレ・イヴェント vol.00
展覧会「25人のインスタレーション展」
金沢大学附属小中学校校舎（広坂芸術街建設予定地）
（参加アーティスト25人、入場者約5,000人）

地元を中心に活動しているアーティスト25人が、解体を待つ校舎の教室や廊下を使ったインスタレーション展。教室を塗り込めたり、床板を剥がしたりするなど、校舎の建物にかなりてを加えた大胆な作品や、金沢出身や在住のアーティストによる、この学校に対する記憶、感情が反映された作品などが作成された。

01

1999年9月4日
プレ・イヴェント vol.01
高階　秀爾（前国立西洋美術館館長）
レクチャー「日本美術の伝統とコンテンポラリー・アート」
金沢市立中村記念美術館別館（旧中村邸）（出席者約60名）

日本の伝統的な絵画ー絵巻や屏風絵、浮世絵ーなどに見られる造形と、コンテンポラリー・アートとの関係性についての、豊富なスライドを用いての講演。

02

1999年10月16日
プレ・イヴェント vol.02
八谷　和彦（メディア・アーティスト）
ワークショップ「視聴覚交換マシン」
金沢市立泉野図書館オアシスホール（出席者約50名）

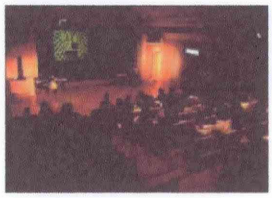
視聴覚交換マシンは、お互いに見ているものを交換する装置。つまり、相手の視点でものが見え、相手が自分になり、自分が相手になる装置。このワークショップでは、アイデンティティの境界を曖昧にすることを目的として制作されたこの作品を、参加者全員が実際に身に付け、体験。

03

1999年11月3日
プレ・イヴェント vol.03
ポール・シンメル（ロサンゼルス 現代美術館チーフ・キュレーター）
レクチャー「21世紀の美術館の変貌」
金沢市立中村記念美術館別館（旧中村邸）（出席者約60名）

現代美術を扱う美術館や施設が、過去30年間にどのように変化し、21世紀の初頭にはどのように変化してゆくのかについて、アート・フェア、ビエンナーレなどの国際展、新しいメディア、娯楽産業との関係から論じた、豊富なスライドを用いての講演。

04



1999年11月27日
プレ・イヴェント vol.04
藤幡　正樹（東京芸術大学教授、メディア・アーティスト）
レクチャー「コンピュータ・ネットワークと人間の表現」
金沢市立泉野図書館オアシスホール（出席者約100名）
デジタルネットワークが持つ可能性についての講演と、ヨーロッパの3つの都市をつないで展示された藤幡氏自身の作品＜ナズル・アファー＞の実演および参加者による体験。

05

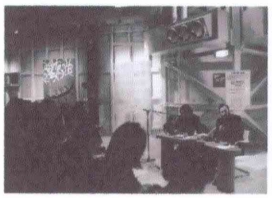
2000年2月26日
プレ・イヴェント vol.05
柏木　博（武蔵野美術大学教授）
レクチャー「情報社会におけるデザインの変遷について」
とどろき亭（出席者約40名）

新しいテクノロジーを背景に、生活様式や社会環境のデザインが問われた、いわゆるマシン・エイジと呼ばれた両大戦間の時代から、エレクトロニクス・エイジである現代まで、デザインそして社会の変容についての講演。

<プレ・イベント vol.00〜vol.18＋α>
*4-4

*4-4 プレ・イベント vol.00〜vol.18＋α
（文献および写真＝
出典：鷲田めるろ，大森美代子 「金沢市現代美術館プレ・イヴェント記録集，1999年度」 金沢市現代美術館建設事務局　2001/03
鷲田めるろ，大森美代子 「金沢21世紀美術館プレ・イヴェント記録集，2000年度」 金沢21世紀美術館建設事務局　2002/03
金沢21世紀美術館建設事務局 「金沢21世紀美術館活動記録集，2001年度」 2002/09
金沢21世紀美術館建設事務局 「金沢21世紀美術館活動記録集，2002年度」 2003）

06



2000年4月28日
プレ・イヴェント vol.06
ハラルド・ゼーマン（キュレーター）
レクチャー「展覧会をつくるということ」
金沢市民芸術村アート工房（出席者約300名）

これまでゼーマン自身が手がけてきた数多くの展覧会の写真を用いての、1960年代から現在までの美術の変遷についての講演。会場では、同時に金沢美術工芸大学美術部による企画展「豪華粗品!!」が行なわれた。

07

2000年9月9日〜15日
プレ・イヴェント vol.07
マシュー・バーニー（アーティスト）
上映会「クレマスター5」「クレマスター4」
シネモンド（入場者約900名）

1週間にわたって行なわれた、マシュー・バーニー作品の上映会。

08

2000年12月17日
プレ・イヴェント vol.08
謝 琳（アーティスト）
ワークショップ「ミステリーパスタ・パーティ」
長町研修館（出席者約親子15組30名）

その内容が当日まで参加者に明かされていなかったワークショップ。「青い物を食べるとどんな気持ちになるのか？」を実際に料理し体験するワークショップ。五感に対して、体に記憶されたものと異なる組み合わせで現れた物にどのように自分が感じるかを意識させる狙い。

09

2001年3月3日〜25日
プレ・イヴェント vol.09
シリン・ネシャット「シリン・ネシャット」展
金沢市民芸術村アート工房、オープンスペース、ドラマ工房

シリン・ネシャットの代表作であるビデオ・インスタレーション3部作と、それと関連する金沢市所蔵の写真作品6点によって構成された日本初のシリン・ネシャットの本格個展。

10

2001年5月26日〜6月10日
プレ・イヴェント vol.10
金沢21世紀美術館収集作品展
金沢市民芸術村アート工房、オープンスペース、ドラマ工房、里山の家（入場者数約13600名）

金沢21世紀美術館建設事務局は1999年度から2000年度末までに46作家68点の作品を収集。このうち63点の作品を金沢市民に向け公開した。

11

2001年11月2日〜4日
プレ・イヴェント vol.11
ストリート・アート・プロジェクト　夢みる広場＠タテマチ
竪町広場（【ti:】's Pocket）、サンジェローム竪町B1、竪町劇場（【ti:】's Hall）（入場者数 約5,600名）

「夢みる広場」とは、新しい生命の息吹を感じさせる希望と可能性をはらんだ場を表す
2004年に向けて開館準備を進めている金沢21世紀美術館の活動を、金沢の情報発信地である竪町広場を中心に一足早く、街の中に出現させようとする試み。

<プレ・イベント vol.00～vol.18＋α>
*4-4

*4-4 プレ・イベント vol.00～vol.18＋α
（文献および写真＝
出典：鷲田めるろ，大森美代子 「金沢市現代美術館プレ・イヴェント記録集，1999年度」 金沢市現代美術館建設事務局　2001/03
鷲田めるろ，大森美代子 「金沢21世紀美術館プレ・イヴェント記録集，2000年度」 金沢21世紀美術館建設事務局　2002/03
金沢21世紀美術館建設事務局 「金沢21世紀美術館活動記録集，2001年度」 2002/09
金沢21世紀美術館建設事務局 「金沢21世紀美術館活動記録集，2002年度」 2003）

12

2002年3月2日，16～17日
プレ・イヴェント vol.12
藤　浩志（アーティスト）
かえっこバザール　プロジェクト
金沢市立城北児童会館（参加者数約120名、来場者数約700名）

「かえっこバザール」は、子どものための都市施設。遊ばなくなったおもちゃを持ち寄り物々交換が出来る。金沢21世紀美術館が、子どもにとっても積極的に楽しめる場所であること、一方でその活動により地元の大人の交流も生まれるような場所になることをアピールしたプロジェクト。

13

2002年9月28日，10月26日，11月2日，12月7日
プレ・イヴェント vol.13
疑いの実験室　Laboratory of doubt
金沢市内4会場（入場者数約400名）

アート・フォーラム・シリーズ「疑いの実験室」は、美術作品を見る経験と、様々な意見を交わす経験とを融合させた試み。作品をきっかけに、美術を含めた幅広い分野と関わりながら議論をすることは、美術作品観賞の大きな楽しみのひとつである。

14

2002年11月16日～12日8日
プレ・イヴェント vol.14
『shape　変容するかたち』展
金沢市民芸術村パフォーミングスクエア
（入場者数約6100名）

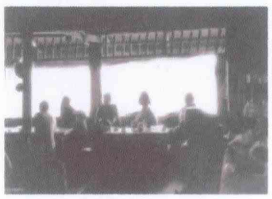
「shape　変容するかたち」展は、金沢市民芸術村での公開した「収集作品展」をひきつぐもので、2001年5月以降に購入した約50点の中から8点を選び構成したものです。「新しい価値観」を示すものとして「shape　変容するかたち」ということばを選んで収集した作品を展示公開。

15

2003年7月12日
プレ・イヴェント vol.15
ピピロッティ・リスト講演会　“トーク・トーク”
石川県兼六園広坂休憩館（入場者数約100名）

アートの役割は、進化に貢献し、人を勇気づけることだと述べ、17年間作品を作り続けた後、少し休んで子供を産み、育てているという現在の自らの状況について説明したあと、スライド、ヴィデオ、コンピュータを使って、2つのスクリーンで最近の作品を中心に紹介しながら、自らの美術に関する考えを語った。

16



2003年8月16日，17日
プレ・イヴェント vol.16
アピチャッポン・ウィーラセタクン（アーティスト）
1）上映会「真昼の不思議な物体」　2）ワークショップ　3）レクチャー
1）シネモンド　2）【tl:】's Labo ～ 匠心庵　3）【tl:】's Hall

「まちに活き、市民とつくる参画交流型の美術館」を目指す金沢21世紀美術館はこのイベントで金沢の街中で映画を見ようという試みを図る。開館前のプレ・イヴェントとして、タイ人の映像アーティスト、アピチャッポン・ウィーラセタクンのワークショップとレクチャーを開催。

17

2003年9月24日～10月18日
プレ・イヴェント vol.17
ダニエル・ビュレンヌ（アーティスト）
作品展示「フェンスのための三角形のダンス」
金沢21世紀美術館 建設現場

金沢21世紀美術館の工事現場を取り囲んでいるフェンスをフランスのアーティスト、ダニエル・ビュレンヌが作品にした。タイトルは、≪フェンスのための三角形のダンス≫。高さ3メートルのフェンスを正方形に区切り、赤、青、紺、緑、紫というカラフルな5色の繰り返しと、その中を回転する三角形でリズム感を生み出す。

＜プレ・イベント vol.00～vol.18＋α＞ *4-4

*4-4 プレ・イベント vol.00～vol.18＋α
（文献および写真＝
出典：鷲田めるろ，大森美代子 「金沢市現代美術館プレ・イヴェント記録集，1999年度」 金沢市現代美術館建設事務局　2001/03
鷲田めるろ，大森美代子 「金沢21世紀美術館プレ・イヴェント記録集，2000年度」 金沢21世紀美術館建設事務局　2002/03
金沢21世紀美術館建設事務局 「金沢21世紀美術館活動記録集，2001年度」 2002/09
金沢21世紀美術館建設事務局 「金沢21世紀美術館活動記録集，2002年度」 2003）

18

2003年9月25日～30日
プレ・イヴェント vol.18
菱山　裕子（アーティスト）
展覧会「菱山裕子　うれしいこと－Delight」展
香林坊アトリオ・アトリウム

ユニークな個性を待ったアルミメッシュの人形たち。どこかで見たような、誰かに似ているような、そんな人なつこい人形たちが、アトリオ吹き抜けの大空間に軽々と、そして縦横無尽に飛び回ります。それは彼らが創り出してくれる、わたしたちの「うれしいこと」の物語。

美術館＋小中学校

2002年10月10日11月1日11月10日11月22日11月23日
美術館＋小中学校連携活動
椿昇（美術家）＋室井尚（哲学者）
「バッタちゃんあらわる！」
金沢市立米泉小学校 / 金沢市立西南部中学校（雨天中止）/ 金沢市立長田町小学校
開館以降の小中学校との連携活動を活発に行なう研究と実践のための研究会を設立。大型作品を展示し、全市的に子ども向けの美術館開館普及活動の一環としてのイベント。

美術館＋大学

2002年12月21日
美術館＋金沢美術工芸大学連携活動
パオラ・ナヴォーネ（デザイナー）
「アーティスト・イン・レジデンス」

金沢21世紀美術館と金沢美術工芸大学が連携して、国際的に活躍する芸術家を招聘して、金沢市内で滞在制作を行なってもらう活動。2001年度から金沢21世紀美術館と金沢美術工芸大学が共同で運営することとなった。

プレ・イベントを通じ、疑問を抱く市民や地元の人たちからの理解を得た。プレ・イベントは、一般的な美術館の持つ「堅苦しく、重々しい、威厳のある空間でのコレクションの収集・保存・展示」という概念を「美術館はアートと出会い、そして皆と共に体験する」という概念へと変換したのである。よそいき服から普段着へと美術館観を一新させたのである。

そして、開館に先立ち、金沢市民に現代美術というものをより、身近に感じてもらい、理解を深めてもらうことがきっかけで始まったプレ・イベントは、地域住民への美術館観を変えただけではなく、さらにもうひとつ重要な足がかりをもたらしている。プレ・イベントは、「プレ・イベント vol.__」と名が付くものだけでも vol.00 ～ vol.18 まで行われ、その関連イベントを含めれば２０回を超える。その活動は 1998 年 10 月 25 日から始まり、開館の１年前まで行われた。プレ・イベント概要でまとめた通り、vol.07 までは、美術館サイドは芸術・美術関係者を誘致し、美術についての講義を地域住民向けに発信している。ここまでは、金沢に現代美術を紹介し、根付かせることを主眼とした取り組みが行われている。そして、2000 年 12 月 17 日に開催されたプレ・イベント vol.08 ワークショップ「ミステリーパスタ・パーティ」を境に、金沢 21 世紀美術館の基本方針のひとつである「子どもたちとともに成長する美術館」＜子ども＋美術館＞という、開館後の金沢２１世紀美術館を思わせる光景がそこで見られる。これこそが、プレ・イベントがもたらした、もうひとつの重要な要素なのである。それはつまり、子ども自体が田の参加者たちと交わりつつ、場の作り手・主役・受け手といった役割を入れ替えながらアート空間が形成され　ていくという構図を提示したのである。プレ・イベントは金沢市民の美術館観を一新し、さらに、美術館と子どもがもたらす可能性に光を当てたのである。

【子どもたちとともに成長する美術館】

次に、金沢21世紀美術館はどのような取り組みで、地域と連携し、地域への波及効果へと還元しようと目論んでいるのか。その答えは、ミュージアム・アイデンティティの中で唱えられ、さらにプレ・イベントの取り組みで、一躍脚光を浴びた、<可能性>である。可能性とはつまり、「子どもたちとともに成長する美術館」のことだ。金沢21世紀美術館は、基本方針のひとつである「子どもたちとともに成長する美術館」を掲げ、子どもを対象とした様々な活動を行ったのである。

この姿勢は美術館の開館前、その構想段階から示されている。先程も触れたが、プレ・イベントを通じて子どもが主体的に芸術に触れ、表現活動をするための場を美術館はつくってきたのである。順をおって、その子どもを対象としたプログラムを見ていこう。まず、開館前の2000年から2004年ごろまで行なわれた活動からは、現在の金沢21世紀美術館の活動の基礎を作っていることがわかる。多くのプログラムで共通しているのは、子ども自身が他の参加者たちと交わりつつ、場の作り手・主役・受け手といった役割を入れ替えながらアート空間が形成されていくという構図を持っていることである。そして、ここでもうひとつ重要な事はその場での大人の役割である。作家だけでなく家族や教育者をはじめ地域の大人たちもまた関わりながら、子どもたちの活動の場を作っているのである。この事象は、大人自身の豊かな経験の場にもなっている。つまり、「子どもたちとともに、大人たちもともに成長している」のである。

＜子どもを対象とした様々な活動＞

*4-5

*4-5 子どもを対象とした様々な活動
（文献および写真＝
出典：鷲田めるろ，大森美代子　「金沢市現代美術館プレ・イヴェント記録集，1999年度」金沢市現代美術館建設事務局　2001/03
鷲田めるろ，大森美代子　「金沢21世紀美術館プレ・イヴェント記録集，2000年度」　金沢21世紀美術館建設事務局　2002/03
金沢21世紀美術館建設事務局　「金沢21世紀美術館活動記録集，2001年度」　2002/09
金沢21世紀美術館建設事務局　「金沢21世紀美術館活動記録集，2002年度」　2003）
金沢21世紀美術館建設事務局　「[R]：a journal contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction　4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」　金沢21世紀美術館建設事務局　2007/03

01

2000年12月17日
プレ・イヴェント vol.08
謝 琳（アーティスト）
ワークショップ「ミステリーパスタ・パーティ」
長町研修館（出席者約親子15組30名）

アーティストとともに、青いクリームソースのパスタを親子で手作りして食べるパーティ。プレ・イベントを通じた、初期段階の子ども向けのワークショップ。「子どもと大人の共同作業」「見慣れた景色に少しずれが生まれた空間作り」を取り込んだ体験型プログラム。開館後の雰囲気を予感させる。

02

2001年5月26日～6月10日
プレ・イヴェント vol.10
「収集作品展」学校団体向けギャラリーツアー
金沢市民芸術村（招待者数1300名＜小学校16校、中学校4校＞）

美術館と学校が連携した初期の活動。これを機に、学校団体を招待してギャラリーツアーをも実施。様々な表現形式のコレクションに触れられる場に広く地域の子どもたちを招待するこのプログラムは、後の「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」のイメージに繋がる。

03

2002年3月2日，16～17日
プレ・イヴェント vol.12
藤　浩志（アーティスト）
かえっこバザール　プロジェクト
金沢市立城北児童会館（参加者数約120名、来場者数約700名）

子どもが主役となり運営するプロジェクト。不要になったおもちゃを集め「とりかえっこ」出来る買い物遊びの場。「子どもと大人の共同作業」で空間を作る活動であり、美術館のコンセプトをわかりやすく見せたイベント。大人65名、小学生55名がお店の運営ボランティアとして参加。

04

2002年10月10日11月1日11月10日11月22日11月23日
美術館＋小中学校連携活動
椿昇（美術家）＋室井尚（哲学者）
「バッタちゃんあらわる！」
金沢市立米泉小学校／金沢市立西南部中学校（雨天中止）／金沢市立長田町小学校
椿昇（美術科）＋室井尚（哲学者）による全長50mのバッタ型バルーン彫刻作品を、学校行事や授業の一部として学校内で共同展示。児童保護者や学校教員など地域の人が協力して膨らませた。「美術館・小中学校連携活動研究会」の発足とともに進めた企画。

05

2003年5月16日
市内中学校美術部合同行事
「部活動の日『金沢21世紀美術館がやってくる～ヤン・ファーブルってどんな人？』」
金沢市民芸術村（参加校数14校371名）

収蔵作品を題材にして、美術部の生徒が美術作品に触れ、作品への理解を深める場を設けた。屋上設置となるヤン・ファーブルの＜雲を測る男＞の展示や、その作品の着想に影響を与えたと言われている映画の紹介を行なった。「部活動の日」の行事は美術館開館後は館内での作品鑑賞やスケッチなどの活動として行なわれる。

06

2003年6月17日、24日、7月1日
「第1回 21@SCHOOL 金沢21世紀美術館がやってくる～『わたしタワー』を作ろう！」
金沢市立明成小学校6年生2学級（42名）対象

美術館の収蔵作品を小学校に展示し、図画工作の年間カリキュラムの一部として鑑賞と子ども自身の作品制作の授業を行う。学芸員と教員が相談し授業計画を作成。学校公開日の授業として地域住民にも建設中の美術館の普及を行なう。これを通じ、キッズスタジオ・ワークショップの進行に活かされ、アシスタント・スタッフの役割などを考えるきっかけにもなっている。

＜子どもを対象とした様々な活動＞

*4-5

*4-5 子どもを対象とした様々な活動
（文献および写真＝
出典：鷲田めるろ，大森美代子　「金沢市現代美術館プレ・イヴェント記録集，1999年度」金沢市現代美術館建設事務局　2001/03
鷲田めるろ，大森美代子　「金沢21世紀美術館プレ・イヴェント記録集，2000年度」　金沢21世紀美術館建設事務局　2002/03
金沢21世紀美術館建設事務局　「金沢21世紀美術館活動記録集，2001年度」　2002/09
金沢21世紀美術館建設事務局　「金沢21世紀美術館活動記録集，2002年度」　2003）
金沢21世紀美術館建設事務局　「[R]：a journal of contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction　4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」　金沢21世紀美術館建設事務局　2007/03

07

2003年9月10日
「第2回 21@SCHOOL 金沢21世紀美術館がやってくる～アートは命の爆発だ！」
金沢市立泉中学校

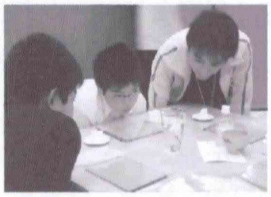
美術館と学校の連携事業としての全校生徒による美術館収蔵作品鑑賞会。椿昇の彫刻＜ESTHETIC POLLUTION＞とジュン・グエン・ハツシバの映像＜ハッピー・ニュー・イヤー＞を鑑賞。鑑賞会で受けたイメージを基に全校生徒でグループ制作を行ない11月の文化祭にて発布スチロール彫刻を展示した。

08

2003年10月25日
学校公開日向け鑑賞授業
「金沢21世紀美術館がやってきた！おしゃべりしましょ！/～あみ・アミでART!～」
金沢市立長田町小学校

美術館・学校連携活動の中でも、学校からの提案により実現した事例。学校を地域に公開する日に教室で収蔵作品を活用して菱山裕子＜秘密の話＞の展示と鑑賞を実施。4年生2学級と5年生2学級を対象（90名）とした授業だったが、地域住民や他校教員の参観もあった。学校などに移動設置しやすい作品をコレクションする必要性も考えられる。

09



2003年11月16日
「夢空間2003」
「お砂糖で作るミニチュアワールド」
金沢文化ホール（参加者約30名）

中学校文化連盟との連携により、市内文化部の合同行事にて中学生の創作プログラムを行なった。漆作家・村田桂彦による角砂糖と漆を用いたオリジナルの小さな世界を創造するワークショップ。地元工芸である漆の新しい表現に触れる機会を提供した。

10

2004年10月9日～11日16日17日23日24日
開館記念展　藤浩志プロジェクト
「かえっこバザール」
キッズスタジオ

地域の大人と子どもが協力をして、不用になったおもちゃの「とりかえっこ」を通じた遊び場をつくるプロジェクト。プレ・イベントで行なった時に参加して以来、地元各地で引き続いて独自に運営を展開させていたグループが核となった。美術館が子どものための場所であることを開館時にアピールする役を担った。

これらのプログラムの特徴は2つ。

1.子どもと大人が共同作業で体験の場を作る活動

2.美術館と学校が連携して行なう活動

1の「子ども」と「大人」のどちらが主体的であるかはその時々で変わるものの、ワークショップ形式で鑑賞や制作を行なう場では子どもも大人も参加同士は対等であり、お互いが自分の気持ちや、相手の表現を大切にすることを心がけている。また、プログラムによって、1と2の両方の性質を持ったものもある。このようにプレ・イベント期の教育普及プログラムでは、それぞれで参加者の主体性を大切にしたり、学校との結びつきに留意している。2004年10月の美術館開館以降に実施された様々なプログラムがスムーズに進められている背景にはこれらの活動による効果も大きい。これらの活動の経験を積み重ねながら美術館サイドが美術館を形成していった一方で、観客サイドの美術館を楽しむ準備運動も次第に芽生えていたことが金沢21世紀美術館を支える力となっている。2004年10月開館時の「かえっこバザール」が大勢の来館者の中で実施できたのも、プレ・イベント以来、地域で「かえっこ」を開催してきた人々が再集結したから可能となったのである。また、2004年11月から3月まで行なわれた市内の小中学生全員を招待する「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」でのボランティア活動者を円滑に集えたのも、友の会準備会“ripple21”（後の「友の会zawart」）などのまちの美術館に集う下地があったことがかなり影響している。また、子どもたち自身が「体中を使って作品を感じる」喜びを開館前に体験していたことも開館後に再来館することへの期待ももたれた。これらの活動の手応えから、「子どもとともに成長する美術館」の形成には「大人も共に成長する」仕掛け作りも大事だと感じた金沢21世紀美術館は数年後に効果が活きるプログラムの組み合わせ方を含めた、子どもが主役の場づくりを実践していくのである。

【ミュージアム・クルーズ・プロジェクトから
ミュージアム・クルーズへ】

金沢21世紀美術館は、開館後の2004年11月から、翌年3月までの約4ヶ月間の、のべ57日間にわたり、市内小中学校ならびに養護学校等95校で学ぶ、児童数約4万人を学校ごとに美術館へ招待する大型プロジェクトを実施した。その名を「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」と呼び、金沢21世紀美術館が掲げている、「子どもたちとともに成長する美術館」という特徴を体現するためにこのプロジェクトは実施された。
このプロジェクトを通じ、美術館サイドが知り得たことは、学校との活動のあり方やボランティアとの共同体制、子どもたちが現代美術に対して豊かな感受性を持ち、先入観を抱くことなく新しい出会いを受けている姿など様々であった。

子どもからの、アンケートによれば、「今回見た作品をまた見たい」「新しい作品を見たい」「家族にまるびぃ（金沢21世紀美術館）を紹介したい」などのリアクションがあり、子どもたちの多くが再来館を望んでいる調査結果となった。実際、専用ガイドブックに2枚ずつ添付した「もう1回券」を約7000枚回収し、週末にはその冊子を手にした家族連れの姿を多く見かけたことから、子どものリピーターが大人を美術館に導いていることがわかる。また、このプロジェクトを支えた約110名のクルーズ・クルー（ボランティア）からのアンケート結果も非常に良く、全員が子どもとの新しい美術館、作品の橋渡し役となった数ヶ月の体験を「（大変）有意義」と捉えており、8割以上が活動継続を希望している。*4-6

*4-6 吉備久美子，木村健 「ミュージアム・クルーズ：活動記録集：金沢市内小学4年生全児童招待プログラム」 金沢21世紀美術館　2007/03　p.4

学校関係者向けアンケートからは、全体の約半数が美術館との連携活動の継続を望んでいること、その場合は“学年単位”での参加を希望していることが判明した。さらに、小中学校教諭との座談会などを通じて、「小学4年生を対象にした継続的な連携活動が、子どもの成長段階や学校行事の観点から見ても適切なのではないか」という方向性も見えてきたのである。これらの活動結果報告をもって、美術館は金沢市教育委員会との協議を重ね、市内小学4年生を学校ごとに招待し、コレクション展を鑑賞する「ミュージアム・クルーズ」を2006年度より企画実施するのである。

【教育普及事業】

美術館の社会的役割が問われている中で、金沢21世紀美術館は、開館時から「子どもたちとともに、成長する美術館」というミッションに取り組んでいる。その姿勢がよく表れている事例が、前述した「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」であり、「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」は美術館に子どもが集う風景を作り出し、子どもを通じて地域と美術館をつなぐ一助となった大きな教育普及プログラムと言える。「ミュージアム・クルーズ・プロジェクト」は2006年度には、長期的に継続することの出来るプログラムへと変化させている。さらに、金沢21世紀美術館では、子どもを中心とした教育プログラムを定期的に行い教育普及事業による地域活性化を試みている。

休日には、子どもたちが造形遊びを自由に楽しめるプレイルームとして開放するほか、展覧会に合わせたワークショップを実施。美術館の利点を生かした、展覧会と連動する鑑賞プログラムやワークショップも実施。2006年度は「コレクション展Ⅰ」、「コレクション展Ⅱ」「人間は自由なんだから：ゲント現代美術館コレクションより展」、「川崎和男展」「リアル・ユートピア～無限の物語展」において、担当キュレーターとエデュケーターが打ち合わせを重ね、鑑賞と制作を組み合わせたプログラムを行った。

それらの子ども対象プログラムを紹介する。

<2005年度のコミュニケーション・プログラム>[*4-7]

■ワークショップ

*4-7 コミュニケーション・プログラム
（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局 「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）

1.「手漕ぎ三輪車」がやってきた！
日時：4月3日 13:00～15:00
参加費：無料
会場：プロジェクト工房前広場
参加者数：小学生以上約30組

造形ユニット・空間工房タシブトフクシマが制作した参加体験型作品<手漕ぎ三輪車>を美術館で2台購入したことを契機に、体験展示。「手でレバーを漕ぎ前進／後進し、足で左右の方向変換する」という通常の三輪車と逆の操作体系を持つ作品。最初は上手く操縦できないのが上達したときの喜びが大きく、子どもたちが繰り返し挑戦していた。

2.「SANAA展」関連
「SANAAに挑戦!! きってならべて大改造マイ・まるびぃを作ろう！」
日時：5月5日7日 11:00～12:30/14:30～16:00
参加費：無料
講師：ゴウヤスノリ（ワークショップ・プランナー）
会場：プロジェクト工房前広場
参加者数：小学生以上合計101名
共同主催：金沢21世紀美術館友の会 zawart

SANAAが金沢21世紀美術館（愛称「まるびぃ」）を設計した過程で、まるい建物の中の部屋の並べ方を100通り以上も考え模型を作ったことにならい、美術館のまるい形の中に参加者もいろいろな部屋の並べ方や欲しい機能などを考えて設計図を描いた。友の会「ワークショップ・サポーター研修」の実践プログラムとして、研修生が企画運営を分担して進めた。

3.「ヒゲキタさんの手作りプラネタリウム＆立体映像シアター」
日時：5月8日 11:00～17:00
参加費：無料
講師：ヒゲキタ（造形作家）
会場：会議室1
参加者数：小学生以上合計250名
共同主催：金沢21世紀美術館友の会 zawart

金沢の作家ヒゲキタ（北村満）による手作りのプラネタリウムとそのドームを用いての立体映像上映。当日シアター21にてシンポジウムを行った、宇宙飛行士の土井隆雄氏ほかJAXA関係者も鑑賞、友の会事業「zawartウィーク」の一環。

<2005年度のコミュニケーション・プログラム>[*4-7]

*4-7 コミュニケーション・プログラム（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局 「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）

4.「地球ぐるぐる」
日時：6月18日19日 13:00～16:00
参加費：1000円
講師：山本浩二（画家、美術教育者）
会場：キッズスタジオ
参加者数：ワークショップ＝80名レクチャー＝約100名
共同主催：（株）金沢倶楽部

関西を拠点に独自のカリキュラムで子どもたちに絵画表現法を伝える山本浩二が指導し、色紙の切り抜きと組み合わせによるデザインや、氷の塊を鑑賞しながらの恐竜世界の絵画などを作成した。子どもたちだけでなく指導者となる大人も対象とし、18日の夜にはレクチャーを行い、講師と子どもたちの活動の様子を紹介した。

5.「たなばた☆まるびぃ」
日時：7月1日～7日 10:00～18:00
参加費：1000円
講師：山本浩二（画家、美術教育者）
会場：キッズスタジオ
参加者数：合計485名
共同主催：子育て生活応援団

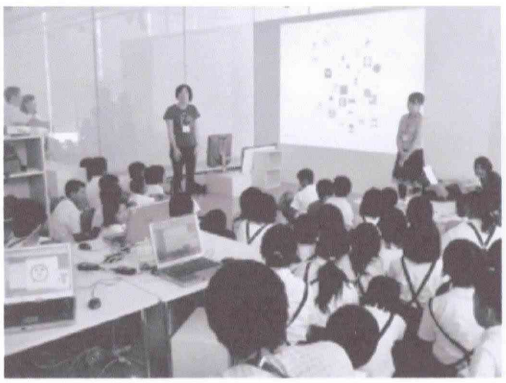
金沢21世紀美術館の保育ルームを運営する「子育て生活応援団」と共同で開催した。幼児～低学年と保護者向けの企画。会場に笹を立て、飾りを作り吊り下げていった。2日、3日には高山市のグループ「音心楽団」が「わらべうたロック紙芝居」をおこなった。

6.「こども映画教室 初等クラス」
日時：7月29日～31日（3日連続）
参加費：1000円
講師：山本浩二（画家、美術教育者）
会場：キッズスタジオ
参加者数：3日間総計40名
共同主催：金沢コミュニティシネマ推進委員会

ソーマトロープやゾーエトロープなどの、映画が発明されたころに生まれた様々な「絵が動いて見える」仕組みを実際に作りながら、自分で描いた絵が動いて見える楽しさを感じ、さらには実際に16mmフィルムに絵を描いて共同制作の映画を作るなどして、映画の誕生までをなぞっていった活動。講師はプロの映写技師を中心に行った。2006年にも継続展開している。

<2005年度のコミュニケーション・プログラム>[*4-7]

*4-7 コミュニケーション・プログラム
（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局 「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）

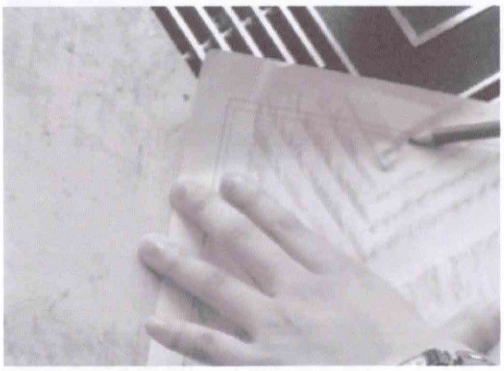


7.「学校連画：絵のリレー まるびぃから生まれる絵」
日時：8月19日20日
講師：D-project（デジタル表現研究会）
会場：キッズスタジオ
参加者数：合計80名

パソコンを利用して「絵のリレー」を行う集団制作のプログラム。前の人が描いた絵の一部から連想した新しい絵を描き次の人に渡す。最後に全員の絵同士の繋がりを壁一面に投影する。講師は小学校の教諭が中心となりパソコンを活用した創作プログラムを研究するグループ。所属の学校を越え広く地域の子どもたちに制作の楽しさを広めた。

8.「サウンド・アーティストになってみよう！水の音ってどんな音？」
日時：8月28日13:00～16:00
参加費：無料
進行：サウンドラボ21
会場：キッズスタジオ
参加者数：20名
共同主催：友の会 zawart サウンドラボ21

開館記念事業のグライアム・リークのワークショップ経験者中心に結成したグループが行っている、サウンド・メイキング・ワークショップ。2006年度にも継続展開。この回は、友の会が広報や材料などをサポート。



9.「地球ぐるぐる」
日時：9月9日10日14:00～15:30
参加費：無料
進行：木村健
会場：キッズスタジオ、敷地内無料エリア
参加者数：合計40名

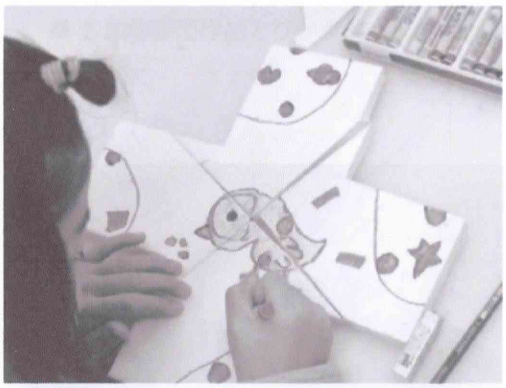
金沢市教育プラザ富樫の保育士向け研修と連動しての企画。9日は保育士向けの研修の形で子どもと遊ぶプログラムを紹介するものとして、10日は一般の子ども向けに行った。ものの表面の凹凸をクレヨンで紙に写し取る「フロタージュ」の技法で、美術館内や外の敷地にある様々なものの型をとる。グループに分かれ敷地内の「手ざわり探し」を行い、取れた模様を大きな白地図の上に貼り付けていった。

<2005年度のコミュニケーション・プログラム>[*4-7]

*4-7 コミュニケーション・プログラム
（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局 「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）

13.「金沢市小中学校合同展」関連「トンギコ工房」
日時：1月7日8日 13:00～17:00
参加費：無料
進行：金谷康弘ほか市内図工科教員
会場：プロジェクト工房
参加者数：総合計1013名

小中学校合同展の関連企画として、図工科の授業のドキュメンタリー映画「トントンギコギコ図工の時間」をシアターで上映するとともに、プロジェクト工房でワークショップを行った。会場に木材の端材を大量に用意し、親子で自由にノコギリやトンカチを使っての造形を行った。指導は市内図工科の教員数名が指導。その他にも、映画監督野中真理子のトークをキッズスタジオで開催。



14.「お絵かきパズル～四角を十字に!?～」
日時：2月25日 14:00～/15:30～
参加費：無料
講師：石黒敦彦
会場：キッズスタジオ
参加者数：30名
共同主催：友の会 zawart

幾何学的な図形遊びと絵画表現を合わせたサイエンス・アートのワークショップ。四角い形を組み替えると十字型になるパズルにクレヨンで絵を描き、2コマに変化する絵画表現に挑戦。友の会「ワークショップ・サポーター研修」の実践プログラム。

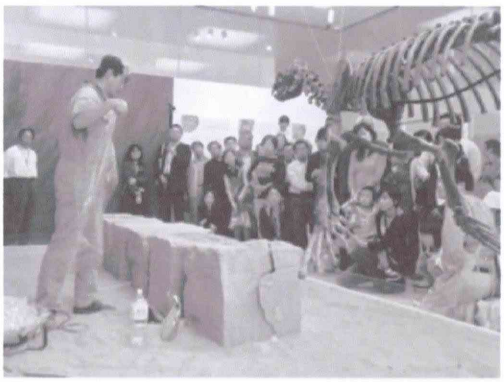
15.「こども映画教室 中等クラス」
日時：3月4日5日
参加費：1000円
会場：キッズスタジオ
参加者数：20名
共同主催・講師：金沢コミュニティシネマ推進委員会

7月のプログラムの発展型。1日目は4枚の写真を組み替えてストーリーを考える「編集」を体験。2日目には4つのグループに分かれて短い脚本を元に映像を撮り、監督・役者・カメラ・音声などの役割を体験した。

<2005年度のコミュニケーション・プログラム>[*4-7]

■ギャラツアー

*4-7 コミュニケーション・プログラム
（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局 「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）



16.「珪藻土プロジェクト」関連
「珪藻土ドキドキ探検隊」
日時：10月15日 10:00～/14:00～
参加費：無料
進行：プロジェクト参加作家
会場：キッズスタジオ～館内
参加者数：30名

珪藻土プロジェクトの各展示会場や制作を行ったプロジェクト工房などを巡りながら、各作家が制作時の様子や作品への思いについて語り、制作の再現などを交えて紹介。

■ 参加体験型作品とワークショップの展覧会

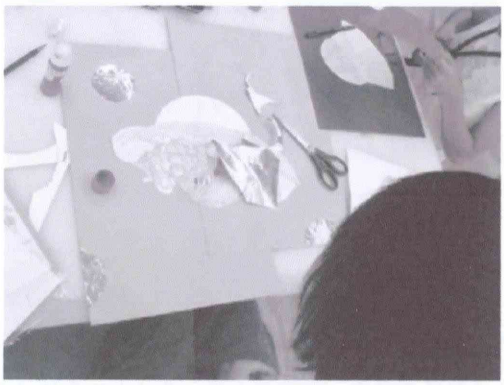
17.「メビウスの卵展15年の挑戦 光のアートランド ～芸術・科学・子どもたちの出会い～」
日時：3月18日～26日
会場：プロジェクト工房、広場、デザインギャラリー、キッズスタジオ、地下ホワイエ、会議室
参加者数：合計46351名
共同主催：メビウスの卵展実行委員会

春休みのこども連れの来館者を対象にした、サイエンス・アートの体験型展示とワークショップの展覧会。15年間全国で展開されている「メビウスの卵展」を総括し、「光とかたちのアート」を展示とワークショップで展開した。幾何学ドームの共同制作に始まり、参加生の高い展示を野外広場や館内各所に配し、また作品を通して自然の不思議に触れるワークショップを多数行った。インターネットを利用したワークショップや視覚障害者の鑑賞支援など、各大学での先駆的な事業と結びついたプログラムも展開した。ワークショップ運営では友の会「ワークショップ・サポーター」も活動。

*4-7 コミュニケーション・プログラム
（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局 「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）

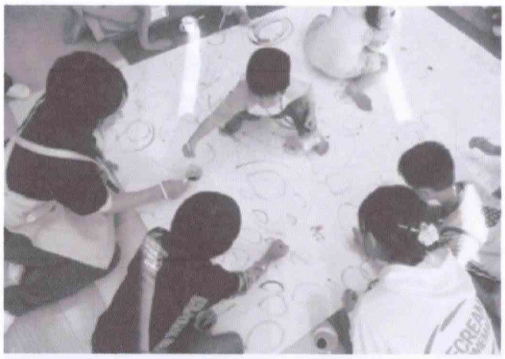
＜2006年度のコミュニケーション・プログラムから＞*4-7

■ ワークショップ



1.「人間は自由なんだから」展関連
「飛んでパナマレンコ」
日時：8月6日 14:00～16:00
参加費：無料
会場：キッズスタジオ、展示室11
参加者数：6歳～中学3年生20名

空を飛ぶことをイメージして作られたパナマレンコの作品をスケッチ。それを切り抜き画用紙に貼り、作品が飛んでいる様子を想像して周囲の風景を画用紙に描く。作家が作品に込めた夢を参加者自身の想像力で広げた絵には、海や草原の上など様々な景色が生まれた。



2.「川崎和男展」関連
「いっぱい削った！いろいろ描いた！」
日時：10月7日14日11月4日 14:00～15:30
参加費：500円
講師：橋本洋子（デザイナー）
会場：キッズスタジオ、展示室11
参加者数：5歳～中学3年生28名

川崎和男のデザインした、子どものための鉛筆削り＜ブラスコラ＞を使って実際に鉛筆や割ばしペンを削り、大きな紙にたくさんの円を描いていった。展示室では日常生活で行う様々なデザイン作品を見つめ、デザイナーが使う人の気持ちを考えて造形した姿勢を感じ取った。川崎展のボランティア・スタッフが進行補助に加わった。

3.「リアル・ユートピア」展関連
「無限の物語を作ろう」
日時：1月28日19日 14:00～16:00
参加費：無料
会場：キッズスタジオ、展示室11
参加者数：6歳～小学3年生6名

岸本清子の絵画作品を鑑賞・部分をスケッチし、そこから想像する物語の場面を画用紙に描き、作品の前で発表した。参加者毎に岸本作品の中で選んだ場所が異なり、そこで空想した風景にも様々な個性が見られた。

＜2006年度のコミュニケーション・プログラムから＞[*4-7]

*4-7 コミュニケーション・プログラム（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局 「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）

4.「コレクション展Ⅱ」関連
「柱の肖像を作ろう！」
日時：2月24日10:00～16:00
参加費：300円
講師：山本浩二（画家、美術教育者）
会場：キッズスタジオ、展示室4
参加者数：小学2～5年生13名

前半にイザ・ゲンツケンの作品＜ダニエル＞＜ローレンス＞等を鑑賞し、作品につけられた作家の身近な人の名前と、その作品の表情の組み合わせをじっくり観察した。後半は子どもたち自身が誰かの名前のついた柱形の作品を制作し、表面の色や素材の組み合わせを工夫した。友人や家族、自分の名前などを付けた、形も色も様々な作品を生んだ。作品発表後ゲンツケンの作品を鑑賞し、自分の作品との比較。

■プレイルーム

5.「かたちで遊ぼう！」
日時：5月3日4日7日/6月24日以降の土日休日13:00～16:00
参加費：1000円
講師：山本浩二（画家、美術教育者）
会場：キッズスタジオ
参加者数：5500名（開催80日）

キッズスタジオに親子で滞在して、幾何学積み木やブロック、ビー球を転がすコース作りなどの形作り遊びを行うプログラム。遊具は購入したものの他、アシスタントにより制作したものを順次展開。3月18日には「コレクション展Ⅱ」に展示中のトニー・クラッグ＜なんとしても＞をイメージしつつ発砲スチロールの円板を積み上げて造形する創作積み木のコーナーを設けた。

6.「七夕☆まるびぃ」
日時：7月7日8日9日
会場：キッズスタジオ
参加者数：396名
協力：子育て生活応援団

2005年度好評だった保育ルームとの連携プログラム。子育て生活応援団が竹の提供と手遊びや絵本読みきかせなどのプログラム運営を担当し、キッズプログラム・アシスタントが七夕飾りの制作を指導。幼児連れの入場者が多く、そろって歌や劇を楽しむ様子が見られた。また、願い事の短冊や色紙の飾り切りなどは若者や、大人も参加。

＜2006年度のコミュニケーション・プログラムから＞[*4-7]

*4-7 コミュニケーション・プログラム（文献および写真＝出典：金沢21世紀美術館建設事務局「[R]：a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4号 2007年 美術館：緩慢なる市民革命の場」 金沢21世紀美術館建設事務局 2007/03）

■ギャラリーツアー

7.「人間は自由なんだから」展関連
こどもの日・親子向けツアー「ゴーゴー !S.M.A.K.（スマック）」
日時：5月5日6日 10:00～12:00/14:00～15:30
参加費：無料（要鑑賞券）
講師：山本浩二（画家、美術教育者）
会場：キッズスタジオ、展示室7～14
参加者数：小学生とその家族60名

こどもの日に合わせた、親子向けのギャラリーツアー。S.M.A.K.の館長から子どもたちへのビデオメッセージを用意。ワークシートを使って、展覧会の中のさまざまな「いきもの」の表現を探し出していった。子どもと大人の視点の違いが多く見受けられ、そこから親子同士で会話が広がる。

8. 乳幼児の保護者向け美術館ツアー
「ママパパ向けまるびぃガイド」
日時：1月31日2月14日3月14日 10:30～11:50
参加費：1・2月無料、3月要鑑賞券
会場：1・2月無料ゾーン、3月コレクション展示

乳幼児とともに来館したときに役立つ情報と作品鑑賞体験をセットにした美術館ガイド。保育ルームや授乳室、プレイルームなどを紹介して館内を散策する。1・2月は無料ゾーン、3月は「コレクション展Ⅱ」を鑑賞。

■プロジェクト

9.「かえっこバザール in まるびぃ」
日時：3月24日25日 10:00～17:00
会場：キッズスタジオ、館内各所
参加者数：のべ約3000名
企画：藤浩志
制作協力：金沢エコライフくらぶ

お金を使わずに遊べる、子どもが主役の広場。家庭で遊ばなくなったおもちゃを持ち寄って、スタンプ「カエルポイント」と交換して買い物遊びやゲームなどを楽しんだ。2002年のプレ・イベント、2004年の開館記念展に続いての開催。金沢ではこれまで、市民グループによる自主運営で何度も行われており、今回はそのネットワークをさらに広げながら、美術館の空間をより活かしたショップや遊び場を展開している。3月4日には藤浩志と金沢・福井・山梨での「かえっこ」運営経験者も交えたアーティスト・トーク＆フォーラム「藤浩志・かえっこ・金沢」を開催。

プログラムの対象年齢は通常小学生から中学生までと設定されている。そのため発達段階の違いから、プログラムの内容や進行に制限はあったという。しかし、異なる学年の子どもたちが接することにより、鑑賞、制作ともに表現に多様性が生まれたことも確かであり、そういった意味では美術館ならでわの出来事と言える。今後は、参加者同士の交流にも目を向け、美術館は社会と出会う場であると言う意識を持った取り組みも期待できるのではないかと感じた。

また、ユニークな活動だと感じたのは子育て世代対象プログラムの「ママパパ向けまるびぃガイド」である。これは、小さな子ども連れでも美術館を楽しんでもらうように企画されたプログラムで、妊婦さんも参加されていたそうである。初回は、託児所や授乳室、親子で楽しめるキッズ・スタジオの施設ガイドに加えて、いつでも気軽に訪れることのできる無料ゾーンのコミッション・ワークの楽しみ方を提案している。別の日程では「コレクション展Ⅱ」を中心としたガイドツアーを行う。実際このプログラムは反響がかなり大きかったらしく、美術館サイドも需要の高さを認識しているようである。子どもを中心とした教育普及活動に力を注ぎ、金沢21世紀美術館は地域との連携を図ろうとしている。さらに、変化を恐れずに果敢に新しいプログラムを企画運営して行くことにより、「ママパパ向けまるびぃガイド」のような、潜在的な新しい顧客を獲得しようとしている。これらの活動は言ってみれば、種まきによく似ている。その種から芽が出るには時間を要するだろうが、しかし、長期的な継続をすることで、地域に根ざした美術館となるのではないだろうか。

【金沢21世紀美術館と周辺環境とのかかわり方】

以上のように、美術館が開館する前に策定した、ミッション・ステートメントから、開館前の美術館普及活動であるプレ・イベント、そして開館後のミュージアム・クルーズ・プロジェクト、ミュージアム・クルーズ、そして、現在行なわれている教育プログラムを見てきた。これら全ての活動について一言で要約するならば、それは「教育普及活動」という言葉で言い表せる。

プレ・イベントは地域住民の美術館観を一新し、より美術館を身近な存在とさせた。ミュージアム・クルーズ・プロジェクトとミュージアム・クルーズは、共に子どもを育てるという面での教育活動であった。子どもに与える教育的要素を自分なりに要約すれば全てで5つの要素に分類することが出来る。1つ目は、「美術館や展示を身近に感じ、大切に思う心」である。これは、美術館内外の独特な空間、珍しい表現、そしてクルーの笑顔の案内により、「美術館はいつ来ても楽しいところ」と、子どもに印象づけられたのではないだろうか。2つ目は、「様々な発想・五感で味わう表現で、子どもの感受性を育てる」ということだ。これは、見たことも、聞いたこともない表現の作品群の説明や、子どもの思いを聞き出すことを訓練されたクルーにより、見て驚きのある、しかも主体的な鑑賞を引き出させている。また、このようなグループ鑑賞とクルーとのコミュニケーションは、3つ目の、「話し合い、思いやるコミュニケーション」を培うための効果的な場となっている。4つ目は、「アートが社会や文化や身近な生活に関係を持っていることを知る」ということがあげられると思うのだが、これに関しては、作者の社会観や価値観が関わっていることもあり、学齢的にも困難だったのではないかと感じる。しかし、「アートは、個々の生活の中での考えや閃きを工夫して表現したものであること」ということは、この経験を通じて子どもが認識できたとしても良いだろう。

最後に「マナーを守って楽しむ」ということ、これは、クルーズ出発時から始まる挨拶や返事、言葉遣いも含め、社会性を実践しながら学ぶとても良い機会と言える。

さらに、ミュージアム・クルーズ参加校の小学校教諭の話では、いつもは、内向的で、日記の課題もわずかにしか書かない子が、普段にない文量で作品を振り返ったことを述べている。その子は積極的にマップを出して確かめながら書いたのか、独特な題名も的確であり、まるで自分の楽しみを見つけたかのような書きぶりであった。すごい機会をいただいたことになる。(参加校の小学校教諭の声より)*4-8

子どもたちを成長させるための施設として、金沢21世紀美術館は、地元小中学校教諭からも支持を得ているのである。

ミュージアム・クルーズ・プロジェクトとミュージアム・クルーズを運営させる上で欠かせないのが、クルーズ・クルーの存在である。クルーズ・クルーとはミュージアム・クルーズに来た小中学生の出迎え、美術館案内、見送りまでをするボランティアのメンバーのことである。開館後の実験的イベントであるミュージアム・クルーズ・プロジェクト時においては、クルーズ・クルーには、ボランティアではあったが、美術館側はあえて1日3000円の有償という体制でプロジェクトに臨んだ。有償となった理由は「ボランティア」にありがちな責任性の薄さへの回避だ。その日に絶対にクルーにいてもらいたいという美術館側の意志のあらわれでもあった。*4-9 そして、ミュージアム・クルーズ・プロジェクトはミュージアム・クルーズへという定期的な活動となりクルーズ・クルーの有償制度もそれに伴い、本格的にボランティア化していくのである。ボランティア化して初めての応募したその結果も、20代から60代という幅広い年代の37名が参加している。交通費の補助を求める声もあるものの、それでも、クルーズ・クルーたちは非常にこのボランティア活動に、やりがい、生き甲斐を感じているという。次頁にクルーズ・クルーたちの生の声であるアンケートを示す。

*4-8 吉備久美子，木村健「ミュージアム・クルーズ：活動記録集：金沢市内小学4年生全児童招待プログラム」金沢21世紀美術館　2007/03　p.23

*4-9 ミュゼ「月刊ミュゼ Vol.72 2005年9月15日 特集：金沢21世紀美術館『ミュージアム・クルーズ・プロジェクト』：『まるびぃ』40000人のリアリティ」2005/09　p.13

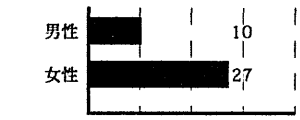
＜クルーズ・クルー向けアンケート＞

金沢21世紀美術館のボランティア活動に登録した中で、「子ども・まるびぃ・コレクション作品」をつなぐ重要な役割を果たしたクルーズ・クルーは、総勢37名である。活動後のアンケート結果と参加状況をまとめる。

1. 美術館までの交通手段
2. 活動情報源は？（複数回答）
3. 参加した動機は？（複数回答）
4. 活動して
5. 今後のクルーズ・クルーの活動への参加について
6. その他、感想や気付いたこと、今後への要望など（自由記述）

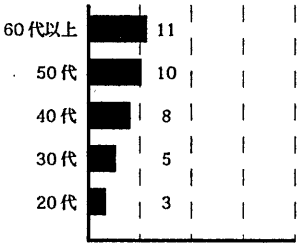
【クルーズ・クルー登録データ】

＜性別＞



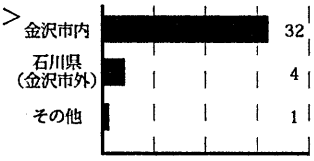
割合は男性：女性＝3：7

＜年代＞



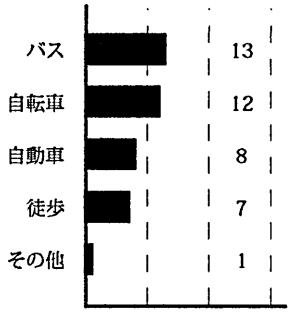
50代、60代以上の参加者が過半数
20代は全て学生

＜住まい＞



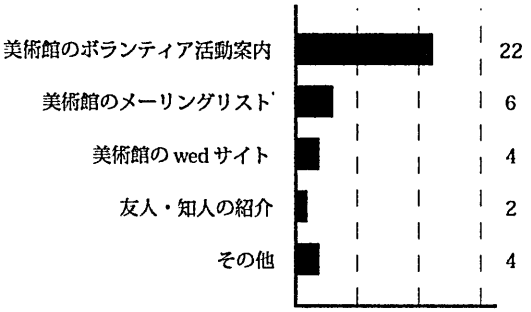
金沢市内在住者が8割以上
「その他」は富山県からの参加

Q1. 美術館までの交通手段



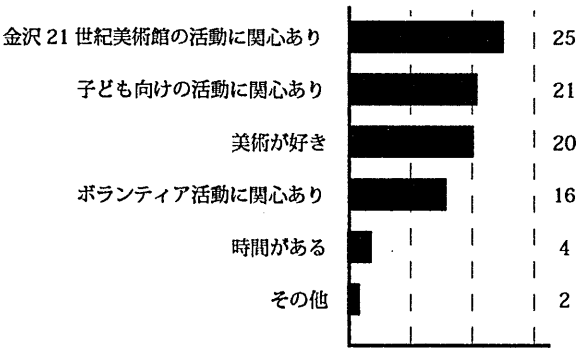
「晴天は徒歩、雨天はバス」などのパターンを記入した人が数名いた。「その他」は原付バイク

Q2. 活動情報源は？（複数回答）



ボランティア登録者に向けて具体的な活動例として「クルーズ・クルー」の告知をしたため、情報源としては「美術館からのボランティア活動内容」が一番多い。「その他」は新聞、金沢ボランティア大学校など

Q3. 参加した動機は？（複数回答）

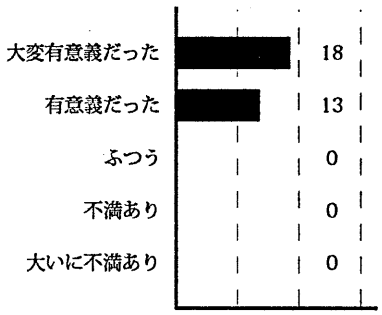


「クルーズ・クルーに参加することで定期的に美術館に来るので、さまざまな情報を得ることが出来て良い」というコメントもあり、美術館活動への高い関心がうかがえる。「その他」として「異世代の人々と関わることが楽しそうだったので」という思いがきっかけになった人も

出典：吉備久美子，木村陸「ミュージアム・クルーズ：活動記録集：金沢市内小学4年生全児童招待プログラム」金沢21世紀美術館　2007/03　p.24～25

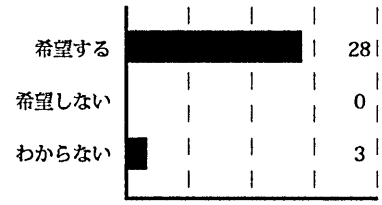
<クルーズ・クルー向けアンケート>

Q4. 活動して



主な理由
「大変有意義」
金銭では得難い楽しみ、喜び、感動、ふれあいがあった / 作品の見方や感じ方がとても広がりました。子どもから学ぶことも多かったです / 今までと違った角度で作品に接することが出来た。研修も有意義でした。よい時間を過ごせました、ありがとうございます /10歳くらいの人と一緒に何かすることは普段の生活ではまずないことで、自分が慣れているコミュニケーションのとり方とは違う方法を模索しなければならなかったり、あらゆることが自分自身の学びの経験だった。また、ひとつひとつの作品・アート全般・美術館というもの・教育について、さまざまなバックグラウンドを持つ人たち（子どもたちも含め、美術館職員やボランティアの方々）の視点やアイデア、経験を共有させてもらえて刺激的だった
「有意義」
聞く事の大切さを改めて学んだような気がする / 現代アートの自分の鑑賞の仕方が会得できたと思う / 作品の接し方を改めて学ぶことができた。子どもの見方のユニークさに驚きを感じた / 若さをもらった（老化進行防止）

Q5. 今後のクルーズ・クルーの活動への参加について



主な理由
「希望する」
生きがい、やりがいを感じる / 美術館の作品を中心に、広がりある考え方や人に出会い、心の栄養をもらえるので / 今回学んだことを生かしたい / 目下の美術館ボランティアとして、唯一参加しやすい企画であることと、小4対象にしぼったこの企画にとても興味があるから / 色んな人の声を聞きたい。感性を大切にしたい。美術館が好きだから / 家から近距離のため交通費がかからない / ずっと続いてほしいプロジェクトなので / 多くの人達（子どもも含め）と一緒に美術鑑賞の機会を得たい
「わからない」
学校の図書ボランティアにも参加しているため

Q6. その他、感想や気付いたこと、今後への要望など（自由記述）

感想・気付いたこと	要望
ほとんどの子どもたちが、活動を楽しんでいってくれたように思います / 心が楽しくなるボランティア活動だった / 自分がここに来て、自分は美術館が好きだと感じたのはもしかするとクルーズを始めてからではないかと感じています / クルーズでのそれぞれの経験を持ち寄って話し合う時間、意見交換の時間がとても限られていたと感じた	交通費補助、あるいは駐車料金の割引の検討をお願いします（複数）/ 今後の活動スケジュールは決まり次第早めに知らせてほしい（複数）/ なかなか自主的に出向くことは出来ないので、研修という形で、定期的にミーティングの機会があれば、より一層の参加者が出るのではないかと思われます（複数）/ 一般の方や、老人を対象の鑑賞プロジェクトが必要かな？ / クルーズで一緒に鑑賞した子たちと今でもあいさつをかわしたり、話し合えたりすることがあるのが一番の収穫かな？ / 研修で展示室の設営の見学ができればとても良いなと思います

出典：吉備久美子，木村健「ミュージアム・クルーズ：活動記録集：金沢市内小学4年生全児童招待プログラム」金沢21世紀美術館　2007/03　p.24～25

クルーズ・クルーのアンケート結果*4-10からわかることは、ミュージアム・クルーズは、小学4年生と美術館との出会いの場でもあるが、同時に、美術館や子ども向けの活動に関心を持つ大人＝クルーズ・クルーにとっても、さまざまな意味での出会いの場となっているということである。2006年度のクルーズ・クルーの中には、2年前のミュージアム・クルーズ・プロジェクトの時のメンバーが20人もいて、美術館担当者を驚かせ、かつ喜ばせている。*4-11

クルーズ・クルーは年度ごとに募集・解散する単年度活動である。しかし、「ミュージアム・クルーズ」を継続することにより、おのずと活動を続ける人、休止する人、復活する人、新しく参加する人が生まれ、徐々にではあるが、美術館という場所に集いともに活動する人間が増えていくのである。

このように、クルーズ・クルーという、美術館や子ども向けの活動に関心を持った一般の人の力を借りながら、しかし、そういったさまざまな出会いの場を提供しながら、相手と寄り添う形で、美術館と地域住民は存在しているのである。

また、地域住民と美術館との交流の場となり、美術館に賑わいをもたらし、地域交流をもたらすという意味で地域を活性化させている活動として、「かえっこバザール」があげられる。「かえっこバザール」とはその活動自体が、子どものための“都市施設”として位置づけられていて、活動自体がハードとソフトの両面の2つを持ったイベントである。アーティストの藤浩志による活動で、金沢だけでなく日本各地でも開催されている。その内容はいたってシンプルであり、遊ばなくなったおもちゃを持ち寄り物々交換が出来るという仕組みだ。金沢21世紀美術館は、このイベントをプレ・イベント時に行ない、金沢21世紀美術館という場所が、子どもたちにとっても、積極的に楽しめる場所であること、一方で、その活動により、地元の大人

*4-10 吉備久美子，木村健 「ミュージアム・クルーズ：活動記録集：金沢市内小学4年生全児童招待プログラム」 金沢21世紀美術館 2007/03　p.24～25

*4-11 クルーズ・クルー集合写真
(出典：吉備久美子，木村健 「ミュージアム・クルーズ：活動記録集：金沢市内小学4年生全児童招待プログラム」 金沢21世紀美術館 2007/03　p.25

の交流も生まれるような場所になることをアピールししようというもくろみで、金沢市立城北児童会館を会場にして、実施している。

実際、このプロジェクトは「子どもと大人の共同作業」で空間をつくる活動であり、美術館のコンセプトがわかりやすく見てとれるイベントだと思う。大人65名、小学生55名がお店の運営ボランティアとして参加し、700名の来場者を呼び込みイベントとしても成功を収めている。

さらに「かえっこバザール」は、美術館のイベントという枠から飛び出し、美術館活動としてではなく、プレ・イベントで参加していたグループが核となり、地元各地で引き続き運営を展開していた。そして、2004年の開館記念展のプロジェクトの1つとして、外に飛び出した活動が、新しく出来た金沢21世紀美術館のキッズスタジオに戻ってきたのであった。その際「かえっこバザール」新たな美術館が、子どものための場所であるという、美術館の大事なコンセプトをアピールする役を担ったのである。*4-12 このお金を使わずに遊べる子どもが主役のイベントは2002年のプレ・イベント、2004年の開館記念展、そして金沢各地での市民グループでの自主運営を何度も繰り返し、2006年には2日間で約3000人もの参加者を動員するイベントとして帰ってきたのである。その時は、キッズスタジオを中心とし、館内各所でもその活動が繰りひろげられ美術館全体がその「かえっこバザール」の賑わいに彩られたのである。

美術館がきっかけとなり始まった1つのイベントが、市民の手に渡り、街に賑わいをもたらし、さらに美術館のもとに戻り美術館に大きな賑わいをもたらしたのである。そういう点では、市民と美術館との両者にとって非常に有意義な結果をもたらし、地域と美術館の双方が活性化された一番の例ではないかと思うのである。

*4-12 かえっことは。
かえっこはいらなくなったおもちゃを使って地域に様々な活動を作り出すシステムです。かえっこでは「カエルポイント」という世界共通の（？）「子ども通貨」（遊びの通貨）を使います。「かえっこ」は独自の子ども通貨「カエルポイント」を使用し、子ども達の様々な自主的な活動を生み出すワークショップです。かえっこの目的は、教育、遊び、環境、リサイクル、商店街活性化、地域活動、国際交流など、主催者や参加者の問題意識や場所の力によって様々に変化します。2000年に福岡で誕生した「かえっこ」は、全国各地の学校、保育園、商店街、公園、公民館、個人住宅、美術館、リサイクルプラザなど３００ケ所以上の様々な場所で開催されてきました。その規模も子ども達だけの運営による小規模の遊びから、自治体が主催する千人規模のイベントまで様々です。子ども達のいらなくなったおもちゃが世界中に循環し続けるしくみとして様々な[illegible]者が活動を支えています。（出典：アーティスト藤浩志のwebサイトによる説明より抜粋。http://www.geco.jp/kaekko/）

*4-13

*4-13　2004年の開館記念展のプロジェクト時の「かえっこバザール」（出典：写真は上記webサイトから）

このように、第4章では、美術館のコンセプトである、「参加性＝まちに活き、市民とつくる、参加交流型の美術館」と「可能性＝子どもたちとともに、成長する美術館」を実現させるために金沢21世紀美術館が取り組んできた教育普及事業に焦点をあて、どのように、美術館が市民との関わりを持ち、地域の活性化について活動してきたのかを見てきた。その活動からは、子どもを中心とした、子どもたちに関わる大人たちを巻き込みながら、徐々に金沢21世紀美術館の理解者を増やしていくという構図が見てとれた。

ミュージアム・クルーズでは、学校教諭たちからの支持を獲得し、学校教諭たちが持っていた美術館観の一新に成功し、現在では、図工・美術の鑑賞授業に美術館を利用する学校も増えてきている。また、年度更新のクルーズ・クルーの存在は、ミュージアム・クルーズが毎年継続して、行なわれれば子どもに関わることと、美術館に関心のある人達の活動の場として、それらに興味のある人達にとって美術館は開かれた場所となるのである。子ども対象のプログラムで紹介した「かえっこバザール」も、あくまでその主役は子どもだが、イベント自体は、その子どもたちの保護者たちによるサポート体制がきちんと整備されていないことには、イベントの成功もありえないということは言うまでもないだろう。

どの教育普及活動も、子どもを中心として事業展開されているものの、その活動を支えるために、数多くの大人たちが、知恵をしぼり、協力し合い、成功へと導いているのである。この、子どもを中心とした地域参画型の取り組み、つまり、事業を成功させるために、子どもを取り巻く大人たちが必死で取り組む姿勢こそが、金沢21世紀美術館がもたらしている「地域力」の活性化の鍵だと思うのである。それは、祭りや子供会の活発な地域で見られる風景と似ている。そういう地域では犯罪や住民の対立が少ない。それは人々が、お互いのことを良く知り、普段からつき合っているからである。子どもを介しての家族同士の付き合いは、大人の世界での付き合いでは障害となるような、職業や所得といった社会階層の差を越えて接触の機会をつくるのである。

子どもを中心とする教育普及活動は、理解と信頼を育み、いざという時のスムーズな問題解決を促すのである。

また「ママパパ向けまるびぃガイド」も教育普及を出発点として活動され、その反応の好評ぶりからは、今まで美術館が見落としていた潜在的な顧客の発掘にもつながっていくと感じた。

このように、金沢21世紀美術館は、教育普及活動を通じ、地域や地域住民の暮らしが、美術館を通じ、より豊かになる可能性を探っているのである。「まちに活き、市民とつくる参画交流型の美術館」とは、地域に育てられる美術館であり、美術館の成長とともに、まちと市民も成長していくのである。金沢21世紀美術館の教育普及事業は、未来を展望する長期的な視点と、地域に根ざし、ともに成長してきた実績を持っている。金沢21世紀美術館は成長段階であり、これからの着実な歩みにも期待が出来る。

第5章　結　論

金沢21世紀美術館にみられる創造都市と美術館の関係性

＜金沢21世紀美術館にみられる創造都市と美術館の関係性＞

これまでの章では、「創造都市」、「金沢の創造都市性」そして「金沢21世紀美術館の周辺環境への取り組み」について見てきた。

創造都市とは

・市民による創造活動が活発である
・文化と産業における創造性が豊かである。
・柔軟な都市経済システムを備えている。
・環境問題や、地域社会の課題に対しての問題解決能力を持つ『創造の場』に富んでいる。

という、4つの特徴を持つ都市の姿のことであった。

そして、金沢の創造都市の特徴は、市民や経済界など、草の根からの動きが都市自治体を巻き込んで展開していったところに、創造都市への基盤が存在し、歴史的街並みを保存し、伝統・文化・伝統工芸産業などを昔から大事にしてきいる。また、その産業構造による内発型発展により、域内でのイノベーションに対する投資が進んでいることも金沢の創造都市性を語る上で重要な要素であった。つまり、市民が参画し、郷土の文化を育てる地盤による、金沢の伝統文化の継承と新しい感覚の市民による都市づくりの姿が、金沢の創造都市性であった。

金沢21世紀美術館の周辺環境への取り組みについては、金沢21世紀美術館が実施している教育普及活動により、「地域力」が向上し、結果として、地域の活性化がもたらされていることがわかった。

創造都市金沢の基盤とも言える市民の参画性を持ち、伝統を継承しながらも常に新しきをもとめ変化を恐れない金沢に、市民参画を主目的とした活動施設、つまり金沢21世紀美術館がさらに「地域力」の向上を手助けし、市民と美術館の交流が絶えない都市づくりへの努力が、金沢21世紀美術館と創造都市金沢の関係性であったように思える。

この章では、金沢21世紀美術館がもたらしたまちづくりの方向性をまとめ、創造都市金沢における金沢21世紀美術館の今日的役割を述べることで、美術館にかせられた役割に触れたこととして、結論とする。

【金沢21世紀美術館がもたらしたまちづくりの方向性】

『ミッション・ステートメントの重要性』

目的を絞り込み、集中的に実施することが必要であると感じた。第4章に記載した、この美術館自らが発信する意思こそが、戦略目標を生み、具体的な行動課題を明確化し、商店街活性化、地域のイメージ変革など、目標を明確にさせ、その達成に向けて各種の施策を展開させることが可能となったのである。

『「創造都市」の主役である、「人材」が人的文化資源となり、事業を成功へと導く』

金沢21世紀美術館場合、地域の文化資源を十分に活用していた。地域の文化資源といっても、歴史的建造物や自然など、通常で考える観光資源などだけではない。キュレーターや学芸員、友の会zawart、クルーズ・クルーのようなボランティアという、人的な文化資源が主体となり、事業を実現していることに着目したい。さらにそれらの活動により、築き上げてきたアーティストや、関係者たちとのネットワーク、業界に関する知識や、行政が持つノウハウ等、そういったネットワークも地域の有する重要な文化資源と言えるであろう。

このような地域が持つ資源、人的な資源なども含めて洗い出し、活用・連携していくことで、その地域独自の文化力が生まれてくるのではないだろうか。地域独自の文化資源を活用することで、その地域で行うからこそ意義がある事業となり、地域に根付いていくのである。

『事業主と参加者(協力者)間の連携=信頼関係が鍵』

金沢21世紀美術館の事業を見ると、行政が単独で行っているということがあまりないことも特徴的だった。子どもを中心とし、それを取り巻く大人や、地域住民、教育関係者等が、一緒になって実施している。これに見られるのは、運営側と連携側の双方共に、事業を行うにあたっての目的が明確であることによる相互に尊重しあう関係性である。

今後、自治体が行うどのような事業においても、市民や民間と連携・協働が重視されていくであろう。したがって、行政側にも、市民や民間との連携を図るにあたっての意識づくり、環境整備などが必要となることを考えると、金沢21世紀美術館のように、市民と行政の交流を生むことを目的とする施設の重要性は、創造都市ということに限らず、どの地域においても必要な存在だと感じた。

『文化芸術を良しとする風土、歴史、文化復興の実績の存在』

金沢21世紀美術館は、今までの「見るだけの美術館」から「参加する美術館」への逸脱をはかり成功している。しかし、その成功の裏には、金沢21世紀美術館より前に文化芸術を「目的」とし、文化復興で実績を挙げている金沢市民芸術村の存在も無視できない。文化芸術を良しとする風土、歴史、そして文化復興の実績があることで、文化芸術の活用について、市民の理解が得やすいという利点がある。文化芸術を活用して地域活性化や経済振興を図る際には、どうしても観光客増加や市外からの誘客など、目が外部を向きがちである。それが結果として成功しても、受益者の多くは域外の人であり、場合によっては、地元の人は、そのエリアに足を踏み入れたこともないということさえ起こりうる。しかし、足元にきちんとした文化施設があり、住民向けの文化事業が行われていれば、特に問題は起きず、共存可能である。実際、プレ・イベント時から交流のある金沢市民芸術村では、美術館開館後も、美術館関連イベントでの連携をとっている。互いが協力し合える非常に理想的な施設館のあり方だと思う。

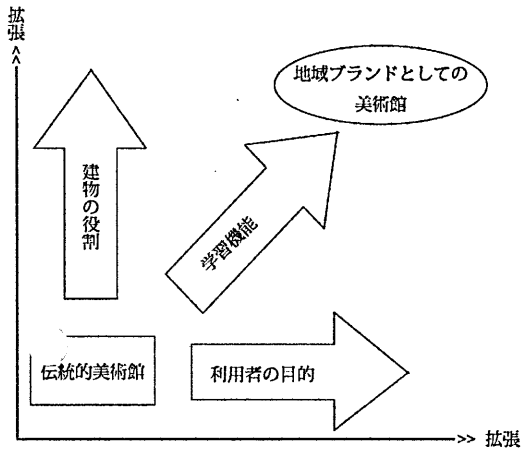
また、「かえっこバザール」のような文化振興のための地道な活動を通じて、地域内、あるいは地域外のアーティストや業界関係者とのネットワークが出来たり、業界に対する知識を獲得した場合にもそういった地盤は大きな役割を果たす。文化芸術を「活用」する場合、アーティストや関係者とギブアンドテイクの関係性を築けることが必要であり、その調整においても、人的ネットワークや業界知識が求められ、活動の場が多いことでさらに地域の活性化へとつながると考えられるからである。

【創造都市金沢における金沢21世紀美術館の今日的役割】

金沢21世紀美術館のとりくみを見ていく中で、美術館の新たな役割が浮き彫りにされてきたように思える。それは芸術品や文化財を収集して管理・保存・研究・展示・教育する“かび臭い伝統的美術館”といったイメージからの脱却である。つまり、展示物主体のコレクションのみでなく、地域ブランドを創生する新たな役割を担うことになってきたということである。

要するに、地域住民の叡智を結集して、何をその地域の記念物的なモニュメントとして設定または創作して、地域おこしの施設にしていくのかが重要なことであるといえる。その意味でも美術館の役割の新たな問い直しが必要であるということがいえる。

美術館の役割としては3つの視点軸で整理・再構築することができる。その第1軸は「建物の役割の見直し」第2軸は「利用者の目的の確認と方向付け」第3軸は「学習機能の拡充」である。*5-1



*5-1 美術館の役割としての3つの視点軸

第1軸の建物の役割の見直しは建物自体が芸術品といったことから、さらに進んで建物自体が知的創造の場となる視点軸である。金沢21世紀美術館の場合で見れば、建築の面白みのみならず、ここには見るだけでなく触れる、遊べる作品がたくさんあるのもユニークな特徴だ。例えば、三輪車に乗って動き回るアート、ピンポンゲームをすることで体感するアート、スイミングプールの底の世界や刻々と変化する空を体感するアートなど。美術館のガラス越しに見る金沢の街の風景、街から見るガラスの建物にいる人々、そういった毎日の動きが現代美術なのだ。そして、それぞれの作品には、美術館のイメージを払拭するような分かりやすい説明や親切なサービスを提供するように心がけられている。この2つの特徴(透明で明るい空間、楽しくわかりやすい体験型アート)は、誰もが気軽に訪れることができる開かれた美術館を演出し、「美術を見せる美術館」から「観て、参加してもらう美術館」への変換に大きな役割を果たしている。

第2軸の利用者の目的は“何を見るのか”でなく“何を体験できるのか”といったことから、さらに進んで利用者相互間、地域住民・地域外の専門化も巻き込んでの地域ブランド創生ネットワーク形成の視点軸である。今まで美術館の状況はといえば、“時間が有るから行って見よう”の意識が未だ見られ、利用者の主体的なニーズの発揚にはなっていない段階である。美術館近辺に住む住民のニーズと遠くから訪れる人々のニーズの2種類に対応することが必要でありながら、一部の美術館は全国向けに発信する意気込みがすごいがゆえに、地元住民は、一度は出かけるにしてもリピーターにはならないということで地元住民との関係が構築できない場合も多い。遠くから訪れる人にとっても意気込みに対して内容が漠然としたものであってはアミューズメントテーマパーク的なものになってしまう。入館者がどういう姿勢で展示品を見て、また体験して、どういう印象

をもって帰ったかといった入館者実態調査・心理研究をしている事例が少なすぎる。一度入館したらその機会を接点として入館者との新しい関係の構築が期待できるのに、美術館が地域ブランドになっていないがゆえに、地域のアイデンティティを確認できないでいる。その点、金沢21世紀美術館は「ママパパ向けまるびぃガイド」や「ミュージアム・クルーズ」を筆頭に、様々な教育普及活動を通じ、新たな顧客の開拓を、地域内で見つけ出そうと努力し、地域に根付いた活動の発展の仕方を探っている。

第3軸の学習機能の拡張は美術館が発信するメッセージで地域が活性化するといったことから、さらに進んで“地域を主体とする知的ネットワーク”と“地域問題解決のためのワークショップの場”が形成されて、地域ブランドとしての美術館に到達する視点軸である。金沢21世紀美術館の場合は教育普及活動からそれらの取り組みが見て取れる。

上述の3つの視点軸は美術館が「点(コレクション)」から「線(住民参加:利用者が自ら鑑賞し、体験し、学ぶ)」へ、さらに進んで「面(地域ブランド:日常的な地域の知的活動の結集の場)」へ進化していくことを意味している。

進化を遂げた美術館が金沢21世紀美術館というコンセプトになるが、それは潜在化していた地域の知的資源を発掘して、それを新たな地域ブランドに磨きあげ地域を活性化させる変革の触媒の機能である。金沢21世紀美術館があることで、地域の街並み・自然景観や伝統工芸・風習といった「地域資源」をあるがままに保存しつつ、相互の組み合わせによる知的コラボレーションを醸成して、地域ブランドの創生を図ることになる。行政と住民がパートナーシップを組んで既存の伝統的建物や史跡を線で結び、地域の祭りやイベント、産業、宿泊、観光などを組み合わせていくといった、地域全体を活性化していく取り組みが創造都市金沢における金沢21世紀美術館の進化のゴールである。これは地域おこし、町おこし運動ともいえるものである。金沢21世紀美術館は美術館の職員・子ども・保護者・学校の教員・行政関係者など全ての住民を構成員とする地域住民の知的アイデアの結集の成果である。

【創造都市における美術館の役割】

美術館の役割は、コレクションの収集、展示、保存の時代から、市民が見て触れて参加する活動がある場所へと変化している。つまり、これはどういうことかと言うと、自分たちの住む地域を誰もが羨むような場所にしようと努力することであり、地域ブランド化を目指すということである。

金沢の場合では、子どもを中心とした教育普及活動により、人材育成という点に力を注ぎ地域の活性化を図っている。このように、金沢は人材育成型の地域ブランド化で地域が活性化されたように、美術館での活動の目的をしっかりと定め、目標を立て、行動におこせば、その目標別により、例えば、地産品販売拡大、観光復興、人材育成、移住者による定住人口の増加など、色々な効果をもたらし、その結果として、それぞれの地域での活性化が見られるようになるのである。

おわりに

本論文は、創造都市の持つ特徴の１つとしてあげられる、「創造都市とは、環境問題、地域社会の問題解決能力を持つ『創造の場』に富んでいる。」ということの中の、『創造の場』の役割を、美術館が担えるのではないかと思い本研究をスタートさせた。金沢の場合では、文献資料という限られた情報の中での研究ではあったが、そこからは、教育普及活動を通じての『創造の場』の提供を地域住民に対し、金沢21世紀美術館が発信していることがわかった。

さらに、その『創造の場』とは、地域の文化、風土、立地、環境などとの深い結びつきを持っている。それは、建築で言うところのサイト・スペシフィックの考え方と同様で、建築を一般論で議論しても答えはなく、具体的な土地を想定してようやく議論できるということと似ている。

この研究を通じ、『創造の場』とは、特別なものであり、その個々の地域にこそ、解決の糸口があるように感じた。それゆえに、地域の住民との対話が大切となってくるのである。重要なのは、地域住民の対話が活発に行なわれる場所であり、それが『創造の場』となる。金沢は、美術館がその役割を担っていたが、その他の都市ではこの限りではないだろう。大切なのは、『創造の場』をどのように生み出せるのかと、地域が手を取り合い協力し、努力を続けることではないだろうか。

参考文献

・佐々木雅幸 「創造都市への挑戦ー産業と文化の息づく街へ」 岩波書店 2001/06
・中牧 弘允，佐々木雅幸，総合研究開発機構（NIRA）「価値を創る都市へ」NTT 出版 2008/04
・佐々木雅幸 「創造都市と日本社会の再生」 公人の友社 2004/04
・ルイス・マンフォード，生田勉訳 「都市の文化」 鹿島出版会 1974（原著出版 1938）
・ルイス・マンフォード，生田勉訳 「歴史の都市、明日の都市」 新潮社 1969（原著出版 1961）
・太田泰人，渡辺真理，水沢勉，松岡智子 「『新版』美術館は生まれ変わる｜ 21 世紀の現代美術館」 2008/09
・楠見清，中山真理＋原田環，長谷川祐子＋不動美里＋北出智恵子「21 世紀のミュージアムをつくるー金沢 21 世紀美術館の挑戦」 2004/10
・李美那，鷲田めるろ 「日本から未来へー Museums by Japanese Architects」「日本から未来へ Museums by Japanese Architects」展実行委員会 美術館連絡協議会 2004
・ライターハウス 「みんなの『金沢 21 世紀美術館』」 主婦と生活社 2008/03
・蓑豊 「超・美術館革命 / 金沢 21 世紀美術館の挑戦」 角川グループパブリッシング 2007/05
・金沢 21 世紀美術館建設事務局 「金沢 21 世紀美術館」 金沢 21 世紀美術館建設事務局 2002
・鷲田めるろ，大森美代子 「金沢市現代美術館プレ・イヴェント記録集，1999 年度」 金沢市現代美術館建設事務局 2001/03
・鷲田めるろ，大森美代子 「金沢 21 世紀美術館プレ・イヴェント記録集，2000 年度」 金沢 21 世紀美術館建設事務局 2002/03
・金沢 21 世紀美術館建設事務局 「金沢 21 世紀美術館活動記録集，2001 年度」 2002/09
・金沢 21 世紀美術館建設事務局 「金沢 21 世紀美術館活動記録集，2002 年度」 2003

参考文献

・吉備久美子, 木村健 「ミュージアム・クルーズ : 活動記録集 : 金沢市内小学 4 年生全児童招待プログラム」 金沢 21 世紀美術館 2007/03
・金沢 21 世紀美術館 「まるびぃアートスクール : 文化庁芸術拠点形成事業報告書」 金沢 21 世紀美術館 2006
・ミュゼ 「月刊ミュゼ Vol.72 2005 年 9 月 15 日 特集 : 金沢 21 世紀美術館『ミュージアム・クルーズ・プロジェクト』:『まるびぃ』40000 人のリアリティ」 2005/09
・金沢 21 世紀美術館建設事務局 「[R] : a journal on contemporary art and culture Office for 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Construction 4 号 2007 年 美術館 : 緩慢なる市民革命の場」 金沢 21 世紀美術館建設事務局 2007/03
・高階 秀爾, 蓑 豊 「ミュージアム・パワー」 慶応義塾大学出版会 2006/11
・上山 信一, 稲葉 郁子 「ミュージアムが都市を再生する一経営と評価の実践」 日本経済新聞出版社 2003/12

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導いただきました渡辺教授、陣内教授、高村教授に心より御礼申し上げます。

そもそも本論文において美術館に対する研究に取り組むことができたのは、渡辺教授がゼミのプロジェクト中に美術館研究の著書の制作に携わる機会を、学生である私に与えてくれたことが大きなきっかけとなっています。このような貴重な機会を与えてくださった渡辺教授、太田泰人先生、水沢勉先生、松岡智子先生、鹿島出版会の久保田昭子さまに深く感謝いたします。ゼミ内での発表や、共に修士研究に取り組んだ研究室の仲間たち、特に同研究室の板橋ゆうこさんとは論文制作にあたり、共に協力し合いお互いを刺激し合った仲なのでこの場を借りて御礼申し上げたいと思います。この論文は本当に多くの方々に支えられてできあがったものであるとあらためて感じています。

最後に、あたたかい励ましをいつも送り続けてくれた家族に心から感謝します。

2009年2月13日 山田　泰幹